資料４

２０２５年国際博覧会検討会　報告書
（案）

平成２９年３月

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３

第１部　２０２５年国際博覧会のコンセプト
１．開催意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
２．基本理念（骨子案）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
３．テーマ・サブテーマ（案）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
４．２０２５年国際博覧会実施の方向性・・・・・・・・・・・・・・・・・11

第２部　２０２５年国際博覧会の円滑かつ効果的な開催に向けた考え方
１．開催場所・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
２．開催期間・開場時間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
３．開催主体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
４．入場者想定規模・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
５．輸送・宿泊計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
６．関連基盤整備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
７．長期的地域整備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
８．環境への配慮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
９．開催経費・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
10．経済波及効果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

参考資料
１．国際博覧会について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
２．国際博覧会条約締約国一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
３．国際博覧会条約に基づいて開催された国際博覧会・・・・・・・・・・44
４．２０２５年国際博覧会の展開事例集・・・・・・・・・・・・・・・・46

はじめに

２０１６年１１月に大阪府が『「２０２５日本万国博覧会」基本構想（府案）』をとりまとめたことを受け、同年１２月、経済産業省は経済界代表や各界の有識者、地方自治体の代表者等で構成される「２０２５年国際博覧会検討会」を設置し、我が国が２０２５年国際博覧会の開催国に立候補する判断を行うにあたって必要な事項について検討を重ねてきた。

本報告書は、これまでの議論の内容を整理し、検討会としての２０２５年国際博覧会の基本的な方向性を示すものである。第１部では、２０２５年国際博覧会の開催意義や基本理念等を整理し、第２部では開催場所や開催期間、会場・インフラ整備の考え方や経済波及効果等について、基本構想の段階で必要となる検証の結果と、今後必要な検討課題（例：「夢洲まちづくり構想（案）」、会場計画及び関連基盤整備計画、輸送計画などの具体化）を整理している。

２１世紀に入ってからの国際博覧会は、産業発展や技術革新の成果を披露する場としての役割に加え、人類共通の課題解決を提言する場としての役割も求められるようになった。

２０２５年国際博覧会を日本で開催する場合、我々はどのような国際博覧会を主催し、世界に対して何を発信し、実現するべきか。

人類が直面する自然災害・食料不足・病気・暴力等の様々な生存リスク、グローバル化や情報化等の世界的な現象、さらに生命のあり方や人間の生き方を根本的に問い直しうる人工知能やバイオテクノロジー等の新技術の発展を踏まえ、我が国は未来社会における「人間の幸福な生き方」と「それを支える社会経済の未来像」をテーマの中心にすえ、世界各国のパビリオンとともに、様々な議論を生み出す発信の場をつくるべきではないか。

インド独立の父であるマハトマ・ガンディーは「見たいと思う世界の変化に、あなた自身がなりなさい」と述べた。その言葉のとおり、彼は小さな力を結集し、大きな変化をもたらした。

人類が望む未来の生き方や社会とは何かについて、我々自身に改めて問いかけ、その未来社会の実現に向けて市民１人１人が問題意識を持ち、将来の行動を促す場をつくることで、人類の持続可能な発展に寄与するため、我が国が２０２５年国際博覧会の開催国として、速やかに立候補することを期待する。

第１部　２０２５年国際博覧会のコンセプト

１．開催意義

２０２５年国際博覧会の開催意義は、大きく４つの視点に分けられる。国際博覧会そのものが有する意義に加え、「２０２５年に開催する意義」「世界にとって日本や関西・大阪で開催する意義」、「日本や関西・大阪にとっての開催意義」がある。

（１）国際博覧会が有する意義

国際博覧会は、国際条約に基づく唯一の国際的イベントであるとともに、中央政府が開催及び参加の意思決定を行う国家的イベントである。１８５１年のロンドン国際博覧会以降の約１６５年の歴史の中で、国際博覧会はそれぞれの時代の潮流に合わせてその意義を変遷させてきた。

１９～２０世紀前半においては、自国の産業発展や技術革新の成果を展示することで、その繁栄を誇示するという産業振興や国威発揚の役割が中心であった。しかし**人類は二度の世界大戦と環境破壊を経験し、科学技術万能主義の限界と矛盾が明らかになることで、国際博覧会に人類共通の課題解決を提言する場としての役割**も求めるようになった。

このように、現代の国際博覧会は、人類共通の課題の解決に向けたアイデアを発信するとともに、**異なる知と知が融合することで新たなアイデアが生まれる場**としての意義を有している。アイデアは先端技術だけでなく、社会制度や価値観、文化を反映させた、多様かつ幅広いものとなる。

さらに、こうした多様な文化や価値観を知ることや、世界の人々が出会い、交流する場であることが、偏見を排し、**相互理解を醸成する**意義も大きい。

他方、国境を越えた人々の往来が増大し、インターネットが加速度的に普及していく現代において、単に先端技術を披露したり、専門家が交流するだけでは、相対的に意義が小さくなってきており、今後、国際博覧会参加の意義を最大化する新たな試みを検討していく必要がある。

例えば、７０億人以上の世界人口のうち、会場に足を踏み入れられる者はほんの一握りにしか過ぎない。しかし、**会場に行くことができない者や、外国を知る機会が少ない人々にこそ、相互理解を促す国際博覧会の知恵や体験が共有されるべき**である。情報通信や仮想現実等の技術を活用して、**距離の壁を超えていくことが、２１世紀の国際博覧会に求められている**といえる。（同時に、会場に来る意義を高めるため、サイバー上ではなく、対面だからこそ得られる交流の実現も必要となる。）

（２）２０２５年に開催する意義

① 物質的豊かさを求めた**約半世紀前**の高度経済成長期の国際博覧会。精神面も含めた質的豊かさが求められる成熟期の国際博覧会。同じ大阪の地で、その**比較の中で新しい将来像**を描く。

② 多くの国で**高齢化**が進み、社会・経済システムの変革が必要な中で、いくつかの解決策を示す。

③ ２０１５年のミラノ国際博覧会のテーマ「食」、２０２０年のドバイ国際博覧会のテーマ「つながり」、これらの**学びを新しい地域で昇華**させていく。

（３）世界にとって日本や関西・大阪で開催する意義

①日本で開催する意義

日本には以下の特徴があるため、**世界における未来社会の実験場**として、新たなアイデアを実践して世界のイノベーションを加速できる場にできる。

ア．未来社会を考える上で鍵となる要素が揃っている。

a）世界トップレベルの**科学・技術力**を有している。これは軍事目的ではなく、平和目的でのみ開発・使用している。

b）周囲の人々を思いやる**利他精神**を有している。
（例：ブラジル W 杯でのゴミ拾い、震災時のボランティアや助け合い）

c）短期的な利益だけでなく、**長期的・持続的な利益を重視する商いの精神**が根付いている。

d）GDP 世界第３位の資本主義経済でありながら、**中間層が厚く**、制度面で資本主義経済の弱みである格差を是正している。

e）長寿命化・**高齢化**のトップを走り、予防医療や６５歳以降も働き続けられる環境整備の推進など、先端的な取組を実施している。他国は日本の課題や対策の成果を参考にしながら、対策を考えていける。

f)「一億総活躍社会」という、あらゆる人がそれぞれの能力を発揮でき、生きがいを感じることができる社会を既に**政策目標**としている。

g）**自然災害を乗り越え**、災害に強いインフラ構築と危機対応訓練を徹底している。そして自然災害に見舞われつつも、自然を対立的に見るのではなく、畏敬の念をもちながら、**自然と共生**する社会を目指している。

h）**アニメ・漫画**を、大人が楽しめる水準へ高め、様々な発想を伝える**新たなコミュニケーションツール**へと昇華させており、多様な価値観の相

互理解を推進していける。

イ. 多様な文化・価値観を受け入れ、融合してきた歴史と風土を有している。例えば各国の食文化を和食に取り入れて発信するなど、**各国の文化発信に貢献**できる。

ウ. 思想的なタブーがなく、参加主体が**それぞれの思想と発想を自由に発信できる場**を提供できる。

エ. 世界で**最も治安が良い**国の１つで、世界で最も安全な開催環境を提供できる。

②関西・大阪で開催する意義

ア. 和食や伝統芸能、お笑いなど**豊かな文化の発信地**であり、質的な豊かさが実感できる。

イ. 日本第２の都市圏であり、関西国際空港や大阪港など**世界からの交通アクセスが容易**である。さらに正確な時間で運転する地下鉄やバスなど、**世界有数の高水準な都市機能**を有している。

ウ. 大阪商人の「商ハ笑ニシテ勝ナリ」や近江商人の「三方よし」という言葉に代表される**「売り手だけでなく、買い手も満足し、社会貢献もできる商売」を尊ぶ精神の発祥地。**新たな経済システムを議論するのにふさわしい。

エ. **阪神淡路大震災から　３０年**経った２０２５年に、自然災害を乗り越えた姿を見ることができる。

オ. **高い技術**を持ったものづくり企業や医療研究拠点等が**近距離に存在**し、訪日の機会にイノベーションの具体化ができる。

（４）日本や関西・大阪にとっての開催意義

①日本にとっての開催意義

ア. 日本的価値を発信するとともに、人類共通の課題解決に貢献することで国際社会における**日本への理解・信頼**を向上できる。

イ. ラグビーワールドカップ２０１９日本大会、東京２０２０オリンピック・パラリンピック競技大会、関西ワールドマスターズゲームズ２０２１で得た**レガシーを継承**できる。

ウ. **次世代の**若いクリエイターやチャレンジャーの**活躍の機会**にできる。

エ. 会期中の**経済活動の活性化**及び交流によるイノベーション創出により、フロンティアを開拓できる。

②関西・大阪にとっての開催意義

ア．**ライフサイエンス分野、食、起業家精神などの強み**を生かして、**イノベーション**を喚起できる。

イ．心身ともに健康になり、多様な文化や価値観が共生する、誰もが住みやすい**地域づくり**を促進。

ウ．関西の幅広い地域と連携し、相乗効果をあげることで、**観光**を含め、**地域経済や中小企業の活性化**が図れる。特に瀬戸内海に面した夢洲の立地を生かし、四国・中国の観光資源との相乗効果が期待できる。

２．基本理念（骨子案）

（１）これからの人類の生き方とは

４６億年という地球の歴史から見れば、数百万年という人類の歴史は短いといえる。しかし、我々人類は、この短い歴史の中で多くのものを創造してきた。

例えば、自然災害や食料不足、病、暴力などの様々な生存リスクを軽減し、社会を安定化させながら発展するため、安全や平等などを確保する法律や行政組織、社会保障制度等の社会システムや、市場経済や資本主義経済などの経済システムを整備し、競争を通じて経済や科学技術を発達させてきた。未だ、こうした生存リスクに直面している人々は少なくないが、人類はこの課題の克服に挑戦し続けている。

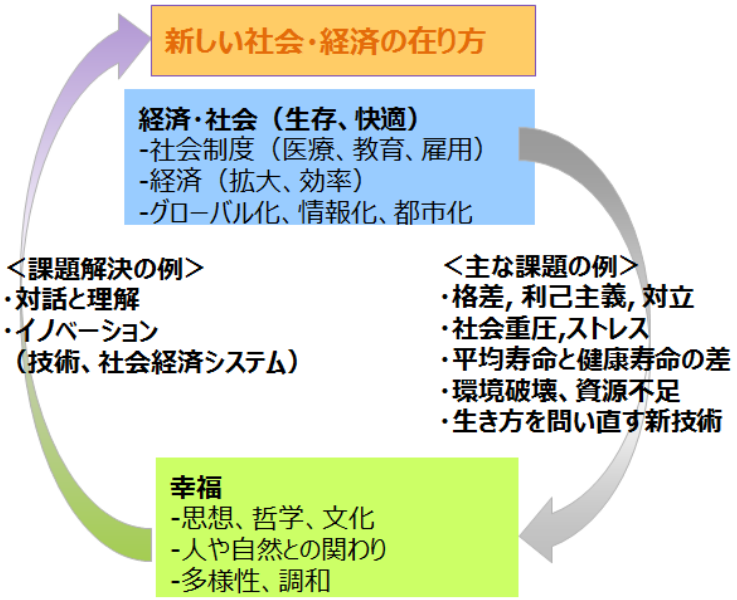
一方でグローバル化や情報化が競争の規模を拡大し、激化させている。競争により生まれる格差は、富の再配分機能が適切に働かなければ、機会の不平等や貧困につながる。人々は競争と過度な効率化の中で余裕をなくし、寛容さを失って利己的になったり、疎外感や怒りを感じることで、対立が顕在化する傾向にあることは否めない。

また人工知能やバイオテクノロジーなど、人間の生き方を問い直し得る新技術の発展は、人類発展の更なる可能性とともに、想定を越えた影響が起きることへの不安と、それによる利活用への迷いを生んでいる。

こうした事象は、我々人類に、幸福な生き方とは何かを問いかけている。

無論この「幸福」は一様ではなく、それぞれが考える「輝く姿」は異なる。

１人１人がそれぞれの能力を生かして、輝ける社会はどんなかたちだろうか。



これらの社会的課題は人類がつくったシステムに由来している。ならば人類には、新たな発想で技術を活用し、社会・経済制度をデザインすることで、解決策を提示していく力があるはずだ。実際にこれまでにも、人類は様々な社会的課題を新たな発想や技術で乗り越えてきた。

（２）好奇心を刺激し、幸福な生き方と社会・経済の未来像を共創する

２０２５年国際博覧会は、こうした問いかけに対して、課題や未知のもたらす懸念や恐怖を煽るのではなく、体験を通じて好奇心を刺激することで、様々な課題を克服しながら１人１人のいのちが輝く生き方と、それを可能にする社会・経済の未来像を参加者全員で共創する場となる。

こうした未来像を、単に１人で思い描くだけでは足りない。古今東西の多様な価値観を有した人々の交流によるイノベーションと相互理解によってのみ、現実のものとなっていく可能性が開ける。こうした交流は、相手の人間性を尊重し、共感を喚起することで、調和的な世界の構築にもつながっていく。

さらに１人１人の生き方自体も、体験・交流して気づくことを通じて、より豊かなものにデザインし直せる可能性がある。

そして参加者による新たな気づきと行動によって、望ましい未来社会が現実になっていく。

１９６０年代に高度経済成長を実現して人々の幸せの基盤となる社会・経済システムを確立した日本では、１９９０年代以降、世界に先立って高齢化が進展するとともに、格差を始め様々な社会的課題が顕在化してきた。

日本は、調和の精神により、多くの人々が幸せになれる助け合いの社会システムを構築してきた経験を踏まえ、１人１人が自分のポテンシャルを発揮しながら真の豊かさを感じられる生き方、そうした多様で調和した生き方を支える持続可能な社会・経済システムを提示することで、人類の持続可能な発展に貢献していきたい。

３．テーマ・サブテーマ（案）

基本理念を踏まえ、テーマ（案）は以下のとおり提案する。

いのち輝く未来社会のデザイン

「Designing Future Society for Our Lives」

なお、今後基本理念の更なる深掘りにより、サブテーマを検討していくこととする。本検討会では、サブテーマ（案）や表現方法を以下のとおり整理した。

＜サブテーマ（案）＞

◆多様で心身ともに健やかな生き方

◆持続可能な社会・経済システム

「体験」、「交流・対話」、「科学・技術」、「多様な文化・思想」を通じてテーマ・サブテーマや基本理念を実感できる万博とする。

※日本で取り組む Society５．０は、「持続可能な社会・経済システム」の１つの例。

４．２０２５年国際博覧会実施の方向性

本項では、基本理念やテーマで掲げるコンセプトの実現に向けた具体的な事業展開及び会場計画の考え方（コンテンツの作成方針、場の在り方）を示す。

具体的には「皆で世界を動かす万博」という理念のもと事業展開を進め、２０２５年国際博覧会を一時的な祭りに留めることなく、「未来の社会・経済システム」の実現を通じて、成果を後世に残す「祭り」としていく。

また、様々な娯楽やメディアが溢れる中、世界中の人々、企業、国等が参画したいと思えるよう、好奇心を刺激し魅了する「常識を越えた万博」、「誰もが参画しやすい万博」を目指す。

＜事業展開面＞

（１）皆で世界を動かす万博

①意思と交流あるところに道は開ける

出展者・来場者を問わず参加者同士が、それぞれが望む未来のライフスタイルとそれを支える社会・経済システムの姿について対話することで、異なる価値観に触れて新たな気づきを得られる場とする。特に参加者の発信を促し、出展者からの一方通行にならないよう留意する。そして、望む未来の実現に向けた行動を起こしやすい仕掛けを構築する。

こうした「意思」と「行動」を受けて、国家や自治体が、未来の社会・経済システムの実現に向けた制度改革を行うことで、理想を現実にしていく。たとえ１人１人の行動が小さな一歩でも、大きな変化を生む源泉になることを示していく。

そのためには、会期中だけでなく、企画段階からあらゆる人が参画することが必要である。すでに本事業展開の検討において、一般社団法人 Future Center Alliance Japan や inochi 学生プロジェクト、MIRAIDEA などの団体・勉強会を通じて、学生や若手社会人などの意見を反映している。今後も若者、ベンチャー企業、ＮＰＯなどが、斬新なアイデアを企画・提案し、人々がそれに投票し、国際博覧会の事業に反映されていくことが必要である。

このように、２０２５年国際博覧会を、１人１人が主体的に考え、行動を起こすことで世界を動かす場とする。

（展開例）

<u>・自分が望む未来のライフスタイルを考え、体験する</u>

自分が死ぬ直前を想定して、遺書をしたため棺桶に入り自分の過去や生き方を回想する。その後、人生において大きな割合を占める、「仕事」「学び」「遊び」などについて、未来の在り方を体験。例えば、拡張現実（ＡＲ）や仮想現実（ＶＲ）を活用して、楽しんで

取り組むことができる仕事を体験し、自分が欲しいノウハウを個人に最適化された学習方法で学び、他国特有のアクティビティなど「遊び」を楽しむ。最後に、明るさ・浮遊感などについて子宮を模したカプセル型入浴装置に入り、短時間で疲労を癒やせる成分のお湯に浸かって、生きる喜びに浸りながら疲れた身体を癒やす。

・好きなコト・周りを幸せにできるコトが価値になる～Human Energy～

スポーツ、ダンス、学び、人助け、健康なものを食べるなど「好きなコト」「周りを幸せにできるコト」をしながら、交流が自然に生まれるような仕組みをつくる。例えばＲＰＧ風の冒険ゲームを設計し、来場者は仲間を集めたりイベントを攻略することで、特別な体験ができたり、ポイント（仮想通貨）を獲得することができる（ポイントは会場内の食べ物やパビリオンの優先入場等を可能とする）など。

②理想を現実化する商い～「三方良し」の風土を踏まえて～

来場者が自分にとって望ましい未来のライフスタイルを考える上で、それを現実化する様々な商品・サービス、活動を体験する機会を設けることが重要になる。

日本には、売り手と買い手がともに満足し、また社会貢献もできる良い商いを尊ぶ風土があり、その発祥地である関西において、ベンチャー企業・中小企業含む国内外の企業や研究機関等は、社会的課題を解決し、かつ人々が望むライフスタイルの実現に資する商品・サービスの実用化・普及に向けて研究開発等を進めることが期待される。政府は規制の適正化や、会場における社会実証を推進することで、こうした取組を促進する（例：Society５．０）。

その際には、①失敗があるからこそ改善し次に進めるという認識を共有し、望む未来の実現に向けた幅広い社会実証に寛容になること②来場者と出展者が対話し、お互いを深く知ることで新しいアイデアを生み出すという視点③政府や投資家、関係企業等が、一定数の人が欲しいと望んだ商品・サービスの実現・普及を支援するスキームが重要である。

（展開例）

・万博ドリーム

実現したい夢をもつ人が、その情熱や事業プラン等をテレビでプレゼンし、視聴者や投資家等がリアルタイムで採否を決定する。採用されたプランは、ビジネスプランであれば視聴者の少額投資（クラウドファンディング）や投資家等のサポートにより事業化し、政策プランであれば国や自治体がサポートして政策への反映に繋げる。

・夢洲スーパー特区

夢洲会場及びその周辺地域を壮大な社会実験場として、医療・健康、ドローン、自動走行、ロボット等のスーパー特区に認定することで、国内外から投資を呼び込みイノベーションを生み出す。

（２）常識を越えた万博

①夢中になる新しい参加、体験が出来る

博物館や美術館では魅力的な作品が展示され、テーマパークや音楽イベント等では参加・体験型の娯楽が溢れている。展示型は言わずもがな、通常の参加・体験型のコンテンツでも既存のイベント等との差別化が難しい状況にある。

そこで、好奇心・幸福感の刺激により来場者が主体的に無我夢中に取り組み、その結果として自分の変化・成長を実感できる新しい参加・体験型のコンテンツを提供していく。

（展開例）

・万人が楽しめるスポーツ

ベビーバスケット※など運動神経があまり関係のない「ゆるスポ」や仮想空間でのスポーツ対戦、あるいは、オリンピック選手の運動能力をパワードスーツによって完全に再現し、人類最速の１００ｍ走が、人類最強のウエイトリフティングが、人類最高難度の体操競技が、パワードスーツを着ることで体験できるコンテンツを提供することで、運動が苦手な人も含めて、皆がスポーツを楽しめるようにする。

※激しく動かすと大声で泣き出してしまう特殊なボールを使ったバスケットボールのゲーム。叩いたり勢い良くなげることやドリブルが禁止されている。

②疲れない・元気になる

人気イベント等は混雑するため「来場者の疲労」を引き起こしやすいので、「待たない」「待っていても楽しめる」工夫や心身に安らぎを与えるコンテンツを提供することで、来場者が「疲れない」「元気になる」国際博覧会を目指す。また来場者に係るデータの収集・分析をもとに、個別に最適化されたサービス提供が行われ、ホスピタリティを感じられるようにする。

（展開例）

・世界お笑いグランプリ

世界各国のお笑いを集めてグランプリを開催。全世界で開催前に予選を行い、勝ち抜いた人が関西地域の色々な地域で行われる本選に参加。地域の人も世界の笑いの文化に触れられる。そして、決勝戦は万博会場で実施。そして、人々は笑いで心を癒やす。

・ロボットが活躍する万博×待ち時間ゼロの万博

日本のアニメ等のキャラクターを模したＡＩ搭載ロボットが清掃、飲食販売、ガイド、来場者の荷物運搬など様々なサービスを担う。ロボットなので多少失敗しても良いことを前提にした時間や空間とする。また、ロボットが来場者に空いているパビリオンを紹介したり、待っている間も楽しめるコンテンツ（ロボットによるパレード等）を提供する。またドローンが荷物を運んでくれ、お土産などの荷物からも解放される。

さらにパビリオンごとに事前に観覧予約を受け付けて時間が近づくと来場者に知らせるシステムにより「待たない博覧会」を実現。

③「メイン会場」の制約を越える

夢洲会場に限らず、国際博覧会のコンセプトを実践的に体験できる場として、本事業展開の方向性と合致した、大阪の街や関西の周辺地域、日本各地にあるコンテンツと連携していく。

また、国内外の夢洲会場へ訪れることができない人に、仮想現実等を活用しながら、空間制約を越えて刺激的な体験を提供することで、参加の概念を変えていく。

同時に、会場全体を拡張現実空間とすることなどにより「会場外にはない体験」を提供し、来場したくなるコンテンツを検討していく。

（展開例）

・Around Kansai

来場者は、万博会場で関西や日本各地の歴史、文化、自然、産業を体験することができ、気になった場所があれば、最適な交通・宿泊のチケットがその場で発券され、円滑に各地へ旅行することが可能。

関西や日本各地の自治体は、万博でのインバウンド需要の機会を活用するべく、会期前から、「未来の生き方」という基本理念や、「体験」「交流」などの事業展開の方向性と合致したかたちで、観光資源の研鑽や産業の集積など街おこしを行い、地域を活性化させる。

④日常にはない出会いが生まれる

国境、民族、言語等の壁を越えて、将来にわたり同じ地球で生きていく「地球市民」としての意識をもつには、多種多様な人々との交流が重要であり、そうした交流は、異なる価値観への相互理解、新しい出会いによる友情、恋愛、ビジネスパーソンの人脈構築などを生み出していく。しかし、同じ時・同じ場所で偶然巡り合っても、人々の交流は中々生まれない。そこで、自動翻訳技術

の進展を活かして言語の壁を取り除くとともに、交流を促進する仕掛けを企画する。

（展開例）

・万博婚

数千万人が来場する万博で、遺伝子データを活用したマッチングなど、新しい出会いを応援する。また、万博会場で、結婚式をあげることも可能とし、幸せを来場者にお裾分けする。

・初対面の人達と遊び、住める万博

来場者は簡単な性格診断の後に、勇者、魔法使い、医者などの仮想のキャラクター（役割）及びコスプレ衣装をあてがわれる。初対面の人とグループを組むと有利に各種イベントを進めるようにすることで、新たな気づきが得られる出会いを演出する。

また、多種多様な民族の男女が一つ屋根の下で一定期間住むことができる住環境を万博内に設定する。そこでは、異文化の人々が織りなすドラマが繰り広げられ、それはドキュメンタリーとして放映される。

このような常識を越えた万博の実現には、一部の国や企業に限らず若者や諸外国の人々・企業にも企画から実行まで担ってもらうとともに、既存の枠にとらわれない自由な発想でアイデアを考えて挑戦していくことが重要。そのため、国際博覧会開催前から世界中の国、企業、人々や国際機関等に、２０２５年国際博覧会が掲げる基本理念に共感してもらうとともに多種多様な提案をいただく機会を設ける。

（３）誰もが参画しやすい万博

①簡単に出展できる工夫

愛知万博以降、市民団体の参加が進んだが、基本的には国際博覧会への出展は多額の費用を要するため、出展主体の中心は、先進国、国際機関・大企業であった。

このため、途上国や国内外の学生、ベンチャー、中小企業、来場者など幅広い主体がオープンな形で参加しやすいように、出展の障壁を取り払っていく取組を検討していく。（場所・期間を限定した出展や、共同出展等）

（４）その他留意点

①会期中に限らない事業展開（企画段階、レガシー）

本コンセプト（基本理念、テーマ等）の実現に向けて、会期中に限らず、会期前後に、関連イベント等の各種取組を行っていく。

②国際機関との連携

国際博覧会開催の要件となっている国際機関との連携について、コンセプトとの関係性を踏まえて、今後検討していく（国際連合の「持続可能な開発計画（SDGs）」など）。

③ボランティアの参加促進

国内外の市民、企業、団体等がボランティアに参加したくなるような仕掛けを検討していく。

④継続的にイノベーションを生み出す仕組みの構築

国際博覧会閉会後も、国際博覧会において人気のあった技術や商品・サービスを展示することで、人々が未来のライフスタイルを常に体験できる環境を整えるなどして、企業、投資家、消費者などがお互いに交流し、イノベーションを生み出す場として、跡地を整備することを検討する。

⑤成功事例の全国・世界への横展開

国際博覧会での社会実証などの成功事例を、産学官が連携して全国あるいは世界中に横展開することで、世界に貢献し、日本の産業振興に繋げる。

⑥儲かる万博の実現

経済効果を飲食、宿泊、交通などの分野ごとに詳細に「見える化」していく。そしてその効果を最大化するために、関西広域・全国で関連イベント等を行うことで、開催地のみならず我が国各地を訪れる国内外の観光客の増加を図る。また、来場者と継続的に関係を構築することで、リピート需要を創出していく。
※過去に日本で開催した国際博覧会の運営収支は全て黒字。２００５年国際博覧会（愛知）の経済効果は、約２．８兆円であった（関連施設整備を含まない）。

会期中のみならず会期の前後に、あるいは国内外に対して、何をするべきかを考え、戦略的にその効果の最大化に努める。

＜参考：事業展開を考えるにあたっての視座（過去の国内博の特徴）＞

国際博覧会は、極めて多くの国・国際機関・来場者が参加・交流すること、人類共通の課題解決に向けて世界の英知を結集させ、未来像を創造することに特徴がある。

我が国でも、過去に５回の国際博覧会を開催し、平均約９０の国・国際機関、約２，７００万人が参加・交流するなど、極めて多くの国・国際機関・来場者が実現されてきた（表１）。また、テーマは時代背景を踏まえて科学技術、環境等に関する人類共通の課題が設定され、国際博覧会の場で解決策を提示し、それが社会実装されることで、社会全体に大きな影響を与えた。例えば、１９７０年の大阪万博では携帯電話や動く歩道が展示され、数十年後には普及した。また、２００５年の愛知万博では、開催後に実用化・普及されたお掃除ロボットが展示されたり、クールビズの普及活動を行い社会に定着した。

表１

区分	名称	テーマ	参加国・機関数	来場者数
一般博	日本万国博覧会	人類の進歩と調和	７６カ国、４国際機関	約６，４００万人
特別博	沖縄国際海洋博覧会	海－その望ましい未来	３６カ国、３国際機関	約３５０万人
特別博	国際科学技術博覧会	人間・居住・環境と科学技術	４７カ国、３７国際機関	約２，０００万人
特別博	国際花と緑の博覧会	－	８２カ国、５５国際機関	約２，３００万人
特別博	２００５年日本国際博覧会	自然の叡智	１２１カ国、４国際機関	約２，２００万人

※５年ごとに開催される大規模な博覧会（登録博覧会）と、その間に開催される博覧会（認定博覧会）の２種類がある。

※１９９６年に現在の「登録博」と「認定博」に区分。それ以前は「一般博」と「特別博」に区分されていた。

一般博：テーマの範囲を人類活動の二以上の部門とし、参加国に自国のパビリオンの建設を求める博覧会

特別博：特定の部門にテーマを絞り、開催者が展示館の建物躯体を建設して、参加国に貸与する博覧会

＜会場計画面＞

（１）人々の交流・憩いの場としての会場

①来場者へのホスピタリティにあふれ、心身ともに元気になる会場

導線設計やパビリオン配置の工夫、段差が少ないバリアフリーの設計などにより、移動時間短縮や短い待ち時間の実現を図る。

また、過去の博覧会の取組を検証しながら暑さ対策をしっかりと行うとともに、緑あふれるレストスペースや運動できるスポーツエリア、リラクゼーションサービス施設を設けるなどして来場者が心身ともに元気になる会場を目指す。

②来場者・出展者など参加者同士の交流を促進

様々な国や地域の参加者が国際博覧会に集まることを活かして、来場者や出展者など参加者同士の活発な交流を促す会場を目指す。

③市民等とともに創る会場

会場構想のデザイン段階から意見交換する場を設けることで市民等からのニーズを把握することや、建築段階でマイクロファンディングなどを活用することで市民等が望む建造物を作り上げることなどを検討する。

（２）環境と調和した会場

①周辺の景観やまちづくりと整合した会場

人工島・水辺に隣接という特徴や眺望を生かすとともに周辺の施設・開発計画も踏まえ、周辺の景観やまちづくりと整合した会場を目指す。

②環境に優しい会場

省エネルギー・新エネルギー技術の積極的導入により、ＣＯ２の排出量を大幅に低減するなど、環境に優しい会場を目指す。

（３）その他留意点

①社会実証の場の提供

最先端の技術、アイデアの社会実証が可能な場を設けることを検討する。

②陸海空における様々な交通アクセスの確保

鉄道や自動車などに加えて、徒歩、自転車、船舶、ヘリコプターなど、様々な交通アクセスを検討する。

なお、会場内の具体的な区域設定や利用計画については、今後詳細な検討を要する。

第２部　２０２５年国際博覧会の円滑かつ効果的な開催に向けた考え方（[1]）

１．開催場所

国際博覧会の開催地域は、人口・経済規模、文化、国際博覧会のコンセプトとの親和性の観点で優れていることが望ましい。また、開催場所は、当該地域の中でも、一定の面積を確保でき、交通アクセスが良好で、既存の都市機能との接続に優れ、かつ跡地全体の利用計画が検討されている場所が望ましい。上記の観点から以下の点を考慮する必要があるが、夢洲は開催場所として各条件を具備していると考えられる。

（１）開催地域としての大阪・関西の妥当性

①人口・経済規模

関西は、人口が２，０００万人以上、総生産額が７，９２６億ドルの巨大な経済圏を成している。産業面では、環境・ライフサイエンス分野の先進企業が多く集積している。

②文化

京都に都が置かれ、関西は長く政治、経済、文化の中心地であったため、寺社仏閣、歴史的建造物、伝統芸能、和食など様々な文化的遺産を有しており、年間約８００万人の外国観光客が訪れている。

③コンセプトとの親和性

大阪・関西は、以下に示しているとおり、２０２５年国際博覧会のコンセプトに係る分野の先進地域である。

・大阪の彩都を中心とした北大阪バイオクラスターや神戸の医療産業都市をはじめとして、京都にある京都大学ｉＰＳ細胞研究所など、世界的なライフサイエンス分野の研究機関、企業等が集積している。
・お好み焼きや京料理など多様な食文化を有している。
・スポーツチームが多く集まるなどスポーツが盛んである。また、ラグビーワールドカップ２０１９日本大会や関西ワールドマスターズゲームズ２０２１など、国際的なスポーツイベントが開催される予定である。

[1]夢洲地域でのＩＲ構想を前提とせず検討している。

・文楽などの伝統芸能からお笑いまで、エンターテイメントに関する幅広いコンテンツを有している。
・大企業に限らず幅広い業種の中小企業が活躍し、様々な個性を持つ人が共に暮らすなど、寛容で多様性に富んだ地域。

（２）夢洲

①長期的地域整備

夢洲まちづくり構想検討会（大阪府・大阪市・関西経済３団体が参加する検討会）において策定された「夢洲まちづくり構想（案）」において博覧会会場跡地の長期的地域整備の方針が示されている。

②既存の都市機能の利用

国際博覧会には、国内外からの多数の観客や各国要人が集まるため、宿泊・商業施設などのサービス基盤の確保の観点から、既存の都市機能を利用できる立地条件が望ましい。会場候補地の夢洲は、大阪市内にあり、都心から直線距離にして西へ約１０ｋｍの距離にあるため、既存の都市機能が容易に利用可能である。

③会場への交通アクセス

国際博覧会の開催にあたっては、多数の来場者を会場に輸送するための交通基盤整備が必要である。大阪・関西までは、航空機、新幹線、高速道路等（※）の既存の交通アクセスルートが充実している。また、夢洲までは、一般道路等の既存の交通アクセスルートに加えて、鉄道延伸や道路拡幅などの将来の整備計画が存在している。

※大阪・関西への主なアクセス
・航空機：関西国際空港、伊丹空港、神戸空港
・船舶：阪神港
・新幹線：東海道・山陽新幹線
・高速道路：名神高速道路・中国自動車道

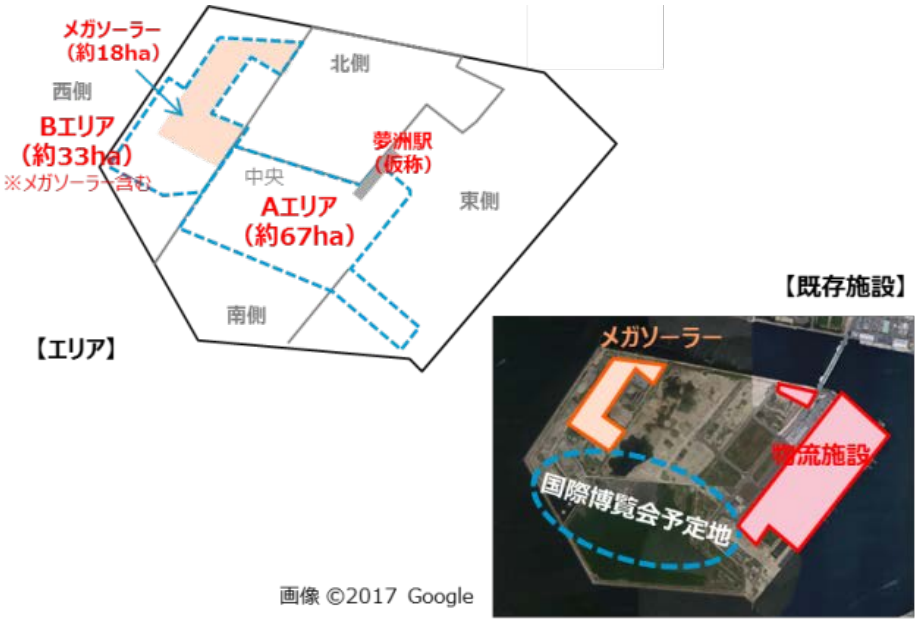
④用地確保

まとまった会場用地の確保が可能であることが前提条件であるが、会場候補地の夢洲は大阪市が所有・所有予定であるため、約１００ｈａの用地確保が容易と考えられる。

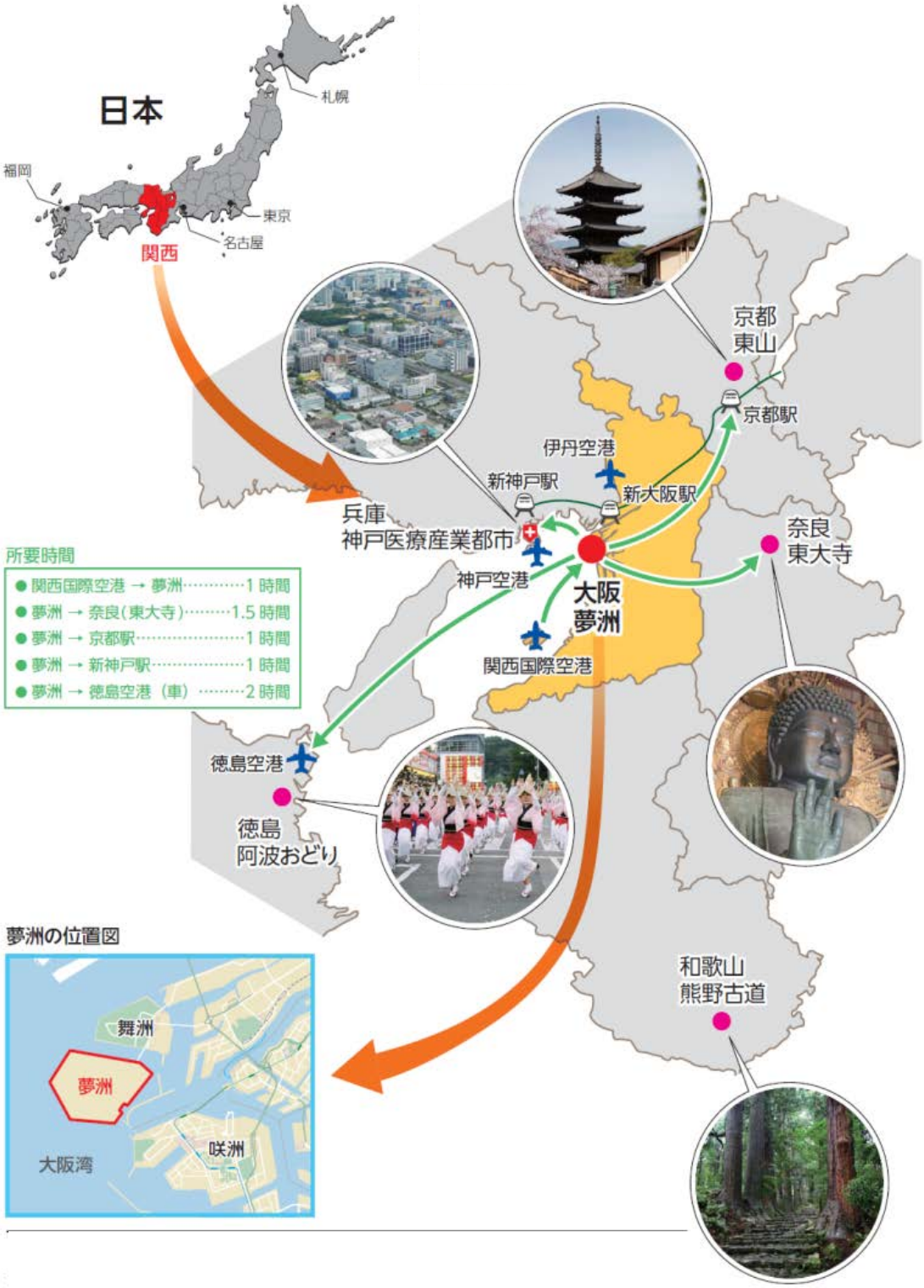
⑤地震対策

国の中央防災会議がまとめた南海トラフ巨大地震の想定震度分布や津波高さ等の推計をもとに、平成２５年に大阪府防災会議が、被害シミュレーションを実施している。その結果、夢洲の地盤（想定津波高さ＋４．３ｍ）は満潮時でも津波が届かない高さとなっている。また、大阪市は、粘性土を主成分とする土砂で埋め立てを進めているため、夢洲は液状化しにくい地盤になっている。

＜参考１　夢洲の現況＞



＜参考２　夢洲へのアクセス＞



２．開催期間・開場時間

（１）開催期間

国際博覧会条約第３条において、登録博覧会は「開催期間が６週間以上６ヶ月以内のものであること」と定められている。２０２５年国際博覧会の誘致を検討するにあたっては、開催期間を６ヶ月間と想定する。

開催期日を検討するにあたっては、多くの来場者を集客するために国内外の観光客等の来場が多く見込め、光熱費を抑制するために寒暖差が少なく、来場者が過ごしやすいように温暖な６ヶ月間が望ましい。開催日及び閉会日は、休日を設定することで、オープニングセレモニー・クロージングセレモニーに多くの来場者が訪れられるように配慮する必要がある。

以上の条件を加味して、２０２５年国際博覧会の開催期間は５月３日（土）～１１月３日（月）の全１８５日間を想定する。

また、開催年に向けて時系列的に国内の気運を醸成するために、関西各地・日本全国の観光地・イベント等や国際機関等とも連携して、プレイベントを開催、さらに、２０２５年国際博覧会で掲げた理念を継承するために、ポストイベントの開催を検討する。

＜参考１：過去に日本で開催された国際博覧会の開催期日（期間）＞

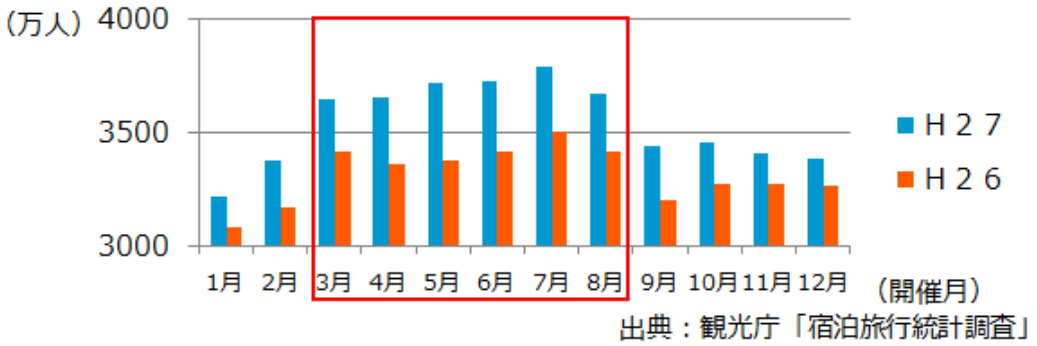
名称	開催期日・期間
日本万国博覧会	昭和４５年３月１５日～９月１３日　（１８３日間）
沖縄国際海洋博覧会	昭和５０年７月２０日～昭和５１年１月１８日（１８３日間）
国際科学技術博覧会	昭和６０年３月１７日～９月１６日　（１８４日間）
国際花と緑の博覧会	平成２年４月１日～９月３０日　（１８３日間）
２００５年日本国際博覧会	平成１７年３月２５日～９月２５日　（１８５日間）

＜参考２：直近３回の国際博覧会（登録博覧会）の開催期日（期間）＞

名称	開催期日・期間
上海国際博覧会	平成２２年５月１日～１０月３１日　（１８４日間）
ミラノ国際博覧会	平成２７年５月１日～１０月３１日　（１８４日間）
ドバイ国際博覧会	平成３２年１０月２２日～平成３３年４月１０日予定（１７１日間）

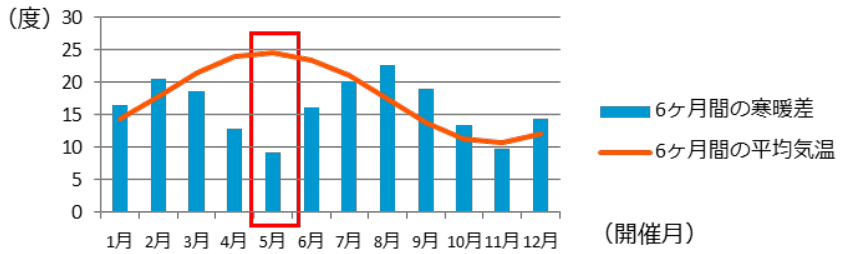
＜参考３：大阪府及び隣接府県の開催月から６ヶ月間の延べ宿泊者数＞

３月～８月のいずれかの月から開催すると、多くの国内外の観光客等の来場が見込まれる。



＜参考４：開催月から６ヶ月間の寒暖差・平均気温＞

５月から開催すると、６ヶ月間の寒暖差が小さく、気候も比較的温暖である。



参考：気象庁HP「大阪　日平均気温の月平均値」2016年をもとに計算

※6ヶ月間の寒暖差：各月の平均気温をもとに、高い月と低い月の温度差を計算。

（２）開場時間

開場時間は、２００５年日本国際博覧会の開場時間（９：００－２２：００）をベースに検討を進める。ただし、ピーク時の来場者を分散するとともに、より多くの来場者を集客するために、鉄道等の交通アクセスや運営費の増加などに考慮しつつ、早朝・深夜の開場時間延長や期間・営業施設を限定した２４時間開催も検討する。

３．開催主体

国際博覧会の開催主体は、国際博覧会条約第１０条により、政府又は開催について当該政府から公式に認められた法人と定められている。

我が国で過去に開催された５回の国際博覧会では、いずれも民法上の公益法人である財団法人国際博覧会協会が開催主体となっている。

過去の例も踏まえて、民間の創意工夫を引き出すことができ、公益性が高い事業を行える財団法人が開催主体として考えられる。

＜参考：過去に日本で開催された国際博覧会の開催主体＞

名称	開催主体
日本万国博覧会	（財団法人）日本万国博覧会協会
沖縄国際海洋博覧会	（財団法人）沖縄国際海洋博覧会協会
国際科学技術博覧会	（財団法人）国際科学技術博覧会協会
国際花と緑の博覧会	（財団法人）国際花と緑の博覧会協会
２００５年日本国際博覧会	（財団法人）２００５年日本国際博覧会協会

４．入場者想定規模

（１）入場者想定規模

過去の国際博覧会の実績を参考にすると、夢洲の会場に６ヶ月間の期間で受け入れ可能な入場者想定規模は約３，０００万人となる。また、過去の国際博覧会の実績、会場候補地の立地条件等をもとに分析すると２０２５年国際博覧会の来場需要は約２，８００万人と予測される。したがって、２０２５年国際博覧会の入場者想定規模は約２，８００万人～３，０００万人と想定する。

（２）多くの来場者、快適な環境を目指すにあたっての留意点

多くの来場者数を目指すとともに、来場者が快適に過ごせるように混雑緩和を行うために、以下の取組を検討する。

①国内外の各種キャンペーン

会期前・中に関西広域の観光地等や国際機関等と連携したイベントを行うことで、国内外の来場者集客を行う。

②会場キャパシティの拡大

会場面積の拡大や建築物の積層化により、展示スペース・入場者対流スペースを拡大し、より多くの入場者を受け入れ可能にすることを必要に応じて検討する。

③来場者の分散

入れ替え制等の各種チケットの導入により来場需要を時間的に分散するとともに、会場設計を工夫して導線を効率化し、来場需要を空間的にも分散することで、来場者の観覧環境を快適にする。

④新たな参加・観覧方法

ＶＲ等の新しいメディアを通じたコンテンツの国内外への幅広い提供により、実際に来場する参加者＋バーチャルでの参加者という形で国際博覧会の来場者の考え方を拡大する。

＜参考１：受け入れ可能な入場者想定規模＞

入場者が滞留する建設面積（※１）を基準に２００５年日本国際博覧会と同レベルの混雑度（※２）を想定した場合、２０２５年国際博覧会の入場者想定規模は約３，０００万人となる。

※１会場面積からメガソーラーパネルや森林などの面積を除いた面積。

※２愛知博では、一部パビリオンは８時間待ち／入場制限を実施。

＜参考２：来場需要予測＞

国内からの来場需要予測（※１）：約２，４７０万人

海外からの来場需要予測（※２）：約３５０万人

※１建設面積、投資額、周辺人口圏、会期日数をもとに、過去の博覧会の実績から分析。

※２訪日外国人の増加傾向を踏まえた上で、訪日外国人が他のテーマパーク等に訪れる割合を参考に試算。

＜参考３：過去に日本で開催された国際博覧会の入場者数実績＞

名称	入場者数実績
日本万国博覧会	約６，４２２万人
沖縄国際海洋博覧会	約３４９万人
国際科学技術博覧会	約２，０３３万人
国際花と緑の博覧会	約２，３１２万人
２００５年日本国際博覧会	約２，２０５万人

＜参考４：直近３回の国際博覧会（登録博覧会）の入場者数実績＞

名称	入場者数実績
上海国際博覧会	約７，３０８万人
ミラノ国際博覧会	約２，１５０万人
ドバイ国際博覧会	約２，５００万人（想定）

５．輸送・宿泊計画

（１）輸送計画の基本的な考え方

大阪への広域アクセスとしては、関西国際空港や大阪国際空港、神戸空港といった関西３空港をはじめ、東海道・山陽新幹線、名神高速道路・中国自動車道などがあり、会場周辺においては、広域交通ネットワークと連携する鉄道・道路網が存在し、会場となる夢洲には大阪市営地下鉄中央線の延伸（北港テクノポート線）や道路の拡幅（４車線から６車線：此花大橋、夢舞大橋）が計画されている。

なお、２０２５年国際博覧会誘致が決定した場合、コスモスクエア駅から新たに開設する夢洲駅（仮称）まで延伸した地下鉄中央線が主な公共交通ルートになる予定である。

出典：大阪市ＨＰの図を一部修正

博覧会の輸送は、会期中の一時的な輸送需要の増加に対応するため、地下鉄中央線延伸を前提に、大阪市内主要駅からのシャトルバス等の運行を行うこと、また、円滑な道路輸送のため、自家用車での来場者は会場外の駐車場でシャトルバスに乗換えて会場へアクセスすることを基本とする。

以上の前提で３，０００万人の輸送計画を検証したところ、地下鉄輸送を最大限活用し、十分な数のシャトルバスを確保できれば、基本的に輸送は可能と考えられる。

なお、より安全に効率よく輸送するために、団体バス駐車場を会場直近に確保すること（アクセス交通削減及びシャトルバス低減が目的）や、駐車場予約システムの導入、海上アクセス（咲洲、舞洲からのシャトルシップ）や航空アクセス（ヘリコプター等）の導入、自動走行システム導入による道路の有効活用、開催期間の時差通勤、徒歩・自転車によるアクセスなどを将来の地域開発計画等を勘案しつつ引き続き検討する必要がある。

（２）宿泊計画の基本的な考え方

大阪府案によると、来場者の宿泊については、大阪府域における宿泊施設のみならず、良好な交通ネットワークと連携した近隣府県の宿泊施設の活用により対応する、とされている。

また現在、大阪府域及び近隣府県（滋賀県、京都府、兵庫県、奈良県、和歌山県）の宿泊施設の空室の定員数は、約１１７，０００人分とある。

一方、ピーク時の１日当たり宿泊予定者数は、来場需要予測（国内約２，４７０万人、訪日外国人約３５０万人）を元にピーク時宿泊予定者数を算出したところ、１０７，０００人となり、現状の収容能力から判断すると、対応可能と考えられる。

ただし、訪日外国人の増加や特定の宿泊施設への集中等により、宿泊施設不足に陥る可能性があるため、それを緩和する工夫が必要である。

特に、訪日外国人の増加傾向は今後も持続することが予想されることから、宿泊受け入れ体制の整備は急務である。

その対応として、訪日外国人増加を見込んだホテル新設の一層の促進、空き家等の民泊への活用、隣接する咲洲に停泊した船舶の宿泊施設としての活用、及び宿泊施設空室情報の提供といった改善策が考えられる。

６．関連基盤整備

２０２５年国際博覧会実施のために必要と考えられる関連基盤整備については、現在、以下の状況であるが、その具体的な整備計画は博覧会の事業企画や会場建設の計画策定段階に検討されるため、その具体的な計画に対応して、現状の基盤整備を増強するなどの検討が必要になる。

・ 上水道
大阪市により夢洲への配水管が引き込まれているが、博覧会会場計画と調整を図りながら会場内へ引き込むことが必要である。

・ 下水道
夢洲は大阪市の下水道処理区域に含まれていないため、汚水については、開発者において浄化槽で浄化した後に海へ放流している。博覧会開催に伴う下水の増加には、浄化槽を設置して対応することを検討する必要がある。

・ 廃棄物
博覧会会場から排出されるごみ・廃棄物は、徹底した分別回収を行い、廃棄物の減量と再資源化の推進を基本とし、廃棄物発電・廃棄物熱利用システムを導入している大阪市・八尾市・松原市環境施設組合舞洲工場等で処理することを検討する必要がある。

・ 電気
夢洲への電気の引き込みは完了しているが、博覧会会場計画と調整を図りながら会場内へ引き込むことが必要である。

・ 都市ガス
夢洲への都市ガス引き込みは完了しているが、博覧会会場計画と調整を図りながら会場内へ引き込むことが必要である。

・ 情報通信
夢洲への光ファイバーの引き込みは完了しているが、博覧会会場計画と調整を図りながら会場内へ引き込むことが必要である。

７．長期的地域整備

（１）基本的な考え方

博覧会の理念を後世に残すレガシーとして、２０２５年国際博覧会のために建設される建物や造形物を長期的に利活用していくことが考えられる。

そのためには跡地利用との整合性を図る必要があるが、博覧会会場においては、夢洲まちづくり構想（案）でその跡地利用についての方針が示されている。

（２）博覧会会場跡地整備の方針

夢洲まちづくり構想（案）では、ＳＭＡＲＴ　ＲＥＳＯＲＴ　ＣＩＴＹを夢洲のコンセプトとし、国際観光拠点形成のための都市機能として、①ＪＡＰＡＮ　ＥＮＴＥＲＴＡＩＮＭＥＮＴ、②ＢＵＳＩＮＥＳＳ　ＭＯＤＥＬ　ＳＨＯＷＣＡＳＥ、③ＡＣＴＩＶＥ　ＬＩＦＥ　ＣＲＥＡＴＩＯＮを掲げている。

博覧会会場跡地においては、ＭＩＣＥ施設や、エンターテイメント施設、商業・飲食施設などによる集客と大阪が強みを有する最先端技術の実践・実証の取組との相乗効果を生み出す産業・ビジネス機能やその関連機能を導入することとし、具体的には、関西の産業振興に寄与する人・モノ・情報・技術の交流拠点の形成やイノベーションにつながる最先端技術（博覧会の成果を含む）のショーケースとなるエリアの形成などの取組の方向性が示されている。

博覧会を契機として関西一体となった取組（例えば、博覧会会場を中心とした観光ネットワーク）については、博覧会のレガシー継承を視野に入れ、具体的に検討を行う必要がある。

８．環境への配慮

（１）基本的な考え方

２０２５年国際博覧会では、環境への配慮は当然のこととして取り組む。夢洲は、「グリーン・テクノロジー・アイランド（環境技術島）」の形成を目指す「環境先進都市・大阪」の新たなシンボルと成りうる。このため、基本的な環境対応に加え、環境エネルギー分野における先進技術・システムの導入を検討する。

（２）会場整備に際しての環境配慮について

博覧会会場の整備に向けて、環境アセスメント制度に則り、必要に応じ、手続や調査・予測・評価を行っていく。

（３）環境配慮のためのポイント

①３Ｒへの対応

会場計画における建築物や造作物は、環境負荷が少なく撤去後のリサイクルや再利用が可能な資材を優先的に採用する。徹底した３Ｒ（リデュース、リユース、リサイクル）を行うため、建築物に再利用が容易なモジュール構造の採用や、撤去時に出た廃棄物の資源化、再利用などを検討する。

会期中に会場から排出される大量のごみや廃棄物は、徹底した分別回収を行い環境負荷の軽減を図る。

②省エネシステムの導入

会場計画における建築物には、環境演出に配慮しながらエネルギー効率が高い建築仕様や構造の実現性について検討する。また建築物の空調、照明には、省エネ仕様のシステムを導入するなど、エネルギーロスの軽減に取り組む。

③スマートエネルギーの実証導入

夢洲まちづくり構想（案）では、スマートシティ「ゼロエミッション・アイランド・夢洲」の実現を目指すとしている。夢洲全体をスマートエネルギーシステムで管理することにより、エネルギーのロスやムダを削減することができる。大阪・関西のエネルギー系企業と協力しながら、 燃料電池、蓄電池、エネルギーマネジメントシステム等によるエネルギーのスマート化の実証実験など

により、エネルギー効率に優れた街を実現する。

④自動運転車やスマートモビリティの導入

夢洲への道路での交通アクセスや２０２５年国際博覧会の会場内の移動には、自動車やＩＴ系の企業の協力により環境負荷の少ないスマートモビリティを実証導入することを検討する。関西国際空港・伊丹空港・神戸空港や大阪のターミナル駅から夢洲へは、大型バスの自動走行や燃料電池バスの連結走行などによるアクセス性を検証する。

（４）更なる効果拡大の視点

①再生可能エネルギーの利用と拡大

夢洲では既にメガソーラーの営業運転が行われているが、これを夢洲の環境シンボルと捉え自然エネルギーを博覧会会場で利用することを検討する。

更には、海に囲まれた夢洲を舞台に再生可能エネルギーシステムの実証実験の導入を検討する。具体的には、以下のような再生可能エネルギーが考えられる。

- 恒久施設の屋上を利用したソーラーシステム
- 周辺海域の潮流を利用した潮力発電システム
- 海水面と深い水深の海水温の温度差を利用した温度差発電システム
- 海風を巧みに利用する小型風力発電システム
- 再生可能エネルギーを利用し海水から水素を生成するシステム　等

９．開催経費

（１）基本的な考え方

国際博覧会の開催に要する経費について、詳細な資金計画は、我が国における開催が確定し、博覧会の事業内容や会場建設の具体的な計画を策定する段階において策定することとなるが、本項では、現段階での推計値及び過去に我が国で開催された国際博覧会の例を基に、開催経費の基本的な考え方を述べる。

①会場建設費

会場内の造成、道路、緑地・広場、共同館、テーマパビリオン、催事場、サービス施設、会場内外駐車場などは国際博覧会主催団体が整備する。

なお、会場建設は、夢洲まちづくりの一環として行われる基盤整備事業と極力整合させて行う。

総額は約１，２５０億円程度を想定する。ただし、具体的な会場計画を考えていく上では、会場内輸送、水上利用、先進国用のパビリオン提供、積層化などについて、その必要性も含め検討の可能性があり、検討の結果として会場建設費に新たな費用が発生する可能性もあるが、できる限り上振れしないよう費用の効率化を徹底することが必要である。

財源は、過去日本で開催された国際博覧会の例から、国、自治体、民間からの拠出（現物を含む）等が考えられるが、それにとどまらず、民間投資を呼び込むアイデアなど、新たな財源確保手法の検討が必要である。

＜参考１：会場建設費の分析結果（単位：億円）＞

	来場者３，０００万人 建設面積８２ｈａ	来場者２，８００万人 建設面積８２ｈａ
基盤整備 （土木造成、舗装、修景工事等）	１３０	１３０
基盤設備整備 （電気、給排水工事等）	２８５	２８５
駐車場、エントランス	１７１	１６５
パビリオン施設、サービス施設	５０３	５０３
会場内演出	５０	５０
その他（調査設計費、事務費）	１０８	１０７
合計	１，２４７	１，２４０

②運営費

運営費は、博覧会開催に係る事業運営、会場管理、広告宣伝等に係る経費で、総額は約約８００～８３０億円を想定する。

財源は、入場料収入等の開催主体の自己財源によりまかなうこととする。

＜参考２：運営費の分析結果（単位：億円）＞

費目	内容	来場者３，０００万人 建設面積８２ｈａ	来場者２，８００万人 建設面積８２ｈａ
事業費	開催主体による企画事業・輸送事業等	５８０	５６０
管理費	会場管理・管理人件費等	１５０	１５０
広告宣伝費	広告、宣伝等	６０	６０
その他	計画・事業調整等	４０	３０
合計		８３０	８００

※愛知博の実績値に対して、来場者比、面積比を用いて各費目を修正。デフレター０．９４４として算定。

③出展事業費

日本国政府、地方自治体、外国政府、国際機関、民間企業等が行う出展事業に係る経費については、出展者の自己の負担とする。

④関連事業費

鉄道整備、道路整備、埋め立て関連などは長期的地域整備を勘案しつつ整備する必要があるが、これらについては、事業主体である自治体において検討されるものである。なお、大阪府案では、下記の関連事業が必要となる可能性があるとされている。

＜参考３：大阪府案における関連事業費（２０１６年度時点）＞

	概算事業費（億円）
鉄道整備等（地下鉄中央線の延伸および輸送力増強等）	６４０
道路改良等（此花大橋・夢舞大橋拡幅等）	４０
南エリア埋立（３０ｈａ）の追加工事費用　※	５０
１区利活用　※	要精査

※ 夢洲まちづくりの事業進捗に応じて実施を検討

１０．経済波及効果

２０２５年国際博覧会において、主催者・出展者等による会場整備に関する建設費は約０．２兆円で、その全国への経済波及効果は約０．４兆円。主催者による会場管理費や出展企業の出展費用等の運営費は約０．２兆円で、その全国への経済波及効果は約０．４兆円。観客等による交通、宿泊、飲食、買い物、サービス等への消費支出は約０．７兆円で、その全国への経済波及効果は約１．１兆円。

また、国際博覧会のコンセプト等に関わる分野の市場伸長、企業の投資拡大、会場外・会期前後における観光・消費需要拡大、関連する大規模イベント開催など、国際博覧会開催により間接的な誘発効果が発生するものと想定される。

＜参考　経済波及効果（試算値）＞

単位：兆円

	建設費	運営費	消費支出
費用 （最終需要額）	０．２	０．２	０．７
全国への 経済波及効果	０．４	０．４	１．１

※試算前提条件

・建設費：主催者による会場整備に関する建設費（約１，２５０億円）
　　出展者による会場整備に関する建設費（約６５０億円）

・運営費：主催者による会場管理費（約８３０億円）
　　出展者による出展費用等（約１，４６０億円）

・入場者想定規模：３，０００万人

参考資料

１．国際博覧会について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
２．国際博覧会条約締約国一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
３．国際博覧会条約に基づいて開催された国際博覧会・・・・・・・・・・・・44
４．２０２５年国際博覧会の展開事例集・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46

１．国際博覧会について

国際博覧会は、国際機関であるＢＩＥ（博覧会国際事務局）の承認のもと、国際博覧会条約に基づき開催される博覧会であり、１９８８年の国際博覧会条約の改正により、５年ごとに開催される大規模の「登録博覧会」と登録博覧会の間に１回だけ開催できる小規模の「認定博覧会」の２つに区分されている。
※旧条約では、大規模な総合博覧会である「一般博」と小規模でテーマが専門的な「特別博」に区分していた。

登録博覧会	認定博覧会
開催期間：６週間以上６ヶ月以内 開催間隔：２つの登録博覧会に、間隔は少なくとも５年以上 会場面積：制限なし ＜過去博＞ 上海万博（２０１０年中国） ミラノ万博（２０１５年イタリア） ＜開催予定＞ 開催地　ドバイ（アラブ首長国連邦） 開催期間　２０２０年１０月２０日～２０２１年４月１０日（１７３日間） 会場面積　４３８ｈａ 想定来場者　２，５００万人 テーマ　心をつなぎ、未来を創る（Connecting Minds, Creating the Future）	開催期間：３週間以上３ヶ月以内 開催間隔：２つの登録博覧会の間に１回だけ開催 会場面積：２５ｈａ以内 ＜過去博＞ サラゴサ万博（２００８年スペイン）、麗水万博（２０１２年韓国） ＜開催予定＞ 開催地　アスタナ（カザフスタン） 開催期間　２０１７年６月１０日～９月１０日（９３日間） 会場面積　２５ｈａ 想定来場者　５００万人 テーマ　未来のエネルギー（Future Energy）

２．国際博覧会条約締約国一覧

１６８カ国が国際博覧会条約に締約（２０１７年２月現在）

アフガニスタン	Afghanistan	リベリア	Liberia
アルバニア	Albania	リビア	Libya
アルジェリア	Algeria	リトアニア	Lithuania
アンドラ	Andorra	マダガスカル	Madagascar
アンゴラ	Angola	マラウイ	Malawi
アンティグア・バーブーダ	Antigua and Barbuda	マレーシア	Malaysia
アルゼンチン	Argentina	モルディブ	Maldives
アルメニア	Armenia	マリ	Mali
オーストリア	Austria	マルタ	Malta
アゼルバイジャン	Azerbaijan	マーシャル諸島	Marshall Islands
バハマ	Bahamas	モーリタニア	Mauritania
バーレーン	Bahrain	モーリシャス	Mauritius
バングラデシュ	Bangladesh	メキシコ	Mexico
バルバドス	Barbados	モナコ	Monaco
ベラルーシ	Belarus	モザンビーク	Mozambique
ベルギー	Belgium	モンゴル	Mongolia
ベリーズ	Belize	モンテネグロ	Montenegro
ベナン	Benin	モロッコ	Morocco
ボスニア・ヘルツェゴビナ	Bosnia and Herzegovina	ナミビア	Namibia
ブラジル	Brazil	ナウル	Nauru
ブルガリア	Bulgaria	ネパール	Nepal
ブルキナファソ	Burkina Faso	オランダ	Netherlands
ブルネイ	Burundi	ニュージーランド	New Zealand
コロンビア	Cambodia	ニカラグア	Nicaragua
カメルーン	Cameroon	ニジェール	Niger
中央アフリア	Central African Republic	ナイジェリア	Nigeria
チャド	Chad	ノルウェー	Norway
チリ	Chile	オマーン	Oman
中国	China	パキスタン	Pakistan
コロンビア	Colombia	パラオ	Palau

コモロ	Comoros	パナマ	Panama
コンゴ共和国	Republic of the Congo	パラグアイ	Paraguay
コンゴ民主共和国	Democratic Republic of the Congo	ペルー	Peru
コスタリカ	Costa Rica	フィリピン	Philippines
クロアチア	Croatia	ポーランド	Poland
キューバ	Cuba	ポルトガル	Portugal
キプロス	Cyprus	カタール	Qatar
チェコ	Czech Republic	ルーマニア	Romania
デンマーク	Denmark	ロシア	Russia
ジブチ	Djibouti	ルワンダ	Rwanda
ドミニカ国	Dominica	サンマリノ	San Marino
ドミニカ共和国	Dominican Republic	セントクリストファー・ネイビス	Saint Kitts and Nevis
エクアドル	Ecuador	セントルシア	Saint Lucia
エジプト	Egypt	セントビンセントトグレナディーン	Saint Vincent and the Grenadines
エルサルバドル	El Salvador	サモア	Samoa
エクアドル	Equatorial Guinea	サウジアラビア	Saudi Arabia
エリトリア	Eritrea	セネガル	Senegal
エストニア	Estonia	セビリア	Serbia
フィジー	Fiji	セイシェル	Seychelles
フィンランド	Finland	シエラレオネ	Sierra Leone
フランス	France	スロベキア	Slovakia
ガボン	Gabon	スロベニア	Slovenia
ガンビア	Gambia	ソロモン	Solomon Islands
ジョージア	Georgia	南アフリア	South Africa
ドイツ	Germany	スペイン	Spain
ガーナ	Ghana	ソマリア	Somalia
ギリシャ	Greece	スリランカ	Sri Lanka
グレナダ	Grenada	スーダン	Sudan
グアテマラ	Guatemala	南スーダン	South Sudan
ギニア	Guinea	スリナム	Suriname

ギニアビサウ	Guinea-Bissau	スワジランド	Swaziland
ガイアナ	Guyana	スーダン	Sweden
ハイチ	Haiti	スイス	Switzerland
ホンジュラス	Honduras	シリア	Syria
ハンガリー	Hungary	タジキスタン	Tajikistan
アイスランド	Iceland	タンザニア	Tanzania
インドネシア	Indonesia	タイ	Thailand
イラン	Iran	東ティモール	Timor-Leste
イラク	Iraq	トーゴ	Togo
イスラエル	Israel	トンガ	Tonga
イタリア	Italy	チュニジア	Tunisia
コートジボワール	Ivory Coast	トルコ	Turkey
日本	Japan	トルクメニスタン	Turkmenistan
ヨルダン	Jordan	ツバル	Tuvalu
カザフスタン	Kazakhstan	ウガンダ	Uganda
ケニア	Kenya	ウクライナ	Ukraine
キルギス	Kiribati	アラブ首長国連邦	United Arab Emirates
朝鮮民主主義人民共和国	North Korea	英国	United Kingdom
韓国	South Korea	ウルグアイ	Uruguay
クウェート	Kuwait	ウズベキスタン	Uzbekistan
キルギス	Kyrgyzstan	バヌアツ	Vanuatu
ラオス	Laos	ベネズエラ	Venezuela
レバノン	Lebanon	ベトナム	Vietnam
レソト	Lesotho	イエメン	Yemen

３．国際博覧会条約に基づいて開催された国際博覧会

年	名称	テーマ　等
1928年	国際博覧会条約締結	
1933年	シカゴ万国博覧会(アメリカ)	
1935年	ブリュッセル万国博覧会(ベルギー)	
1936年	ストックホルム国際博覧会(スウェーデン)	
1937年	パリ万国博覧会(フランス)	
1938年	ヘルシンキ国際博覧会(フィンランド)	
1939年	リエージュ国際博覧会(ベルギー)	
	ニューヨーク世界博覧会(アメリカ)	
1947年	パリ国際都市計画・移住博覧会(フランス)	
1949年	ストックフォルム国際博覧会(スウェーデン)	
	ポルトープランス万国博覧会(ハイチ)	
	リヨン国際博覧会(フランス)	
1951年	リール国際繊維博覧会(フランス)	
1953年	ローマ国際農業博覧会(イタリア)	
	エルサレム国際博覧会(イスラエル)	
1954年	ナポリ国際航海博覧会(イタリア)	
1955年	トリノ国際スポーツ博覧会(イタリア)	
	ヘルシングボイル国際博覧会(アメリカ)	テーマ「現代の人間環境」
1956年	テルアビブ国際博覧会(イスラエル)	
1957年	ベルリン国際建築博覧会(ドイツ)	
1958年	ブリュッセル万国博覧会(ベルギー)	テーマ「科学文明とヒューマニズム」
1961年	トリノ国際労働博覧会(イタリア)	イタリア統□ 100 周年
1962年	シアトル 21 世紀大博覧会(アメリカ)	テーマ「宇宙時代の人類」
1965年	ミュンヘン国際交通博覧会(ドイツ)	
1967年	モントリオール万国博覧会(カナダ)	テーマ「人間とその世界」 カナダ連邦 100 周年
1968年	サンアントニオ国際博覧会(アメリカ)	テーマ「アメリカ□ 陸における□ 化の交流」
1970年	日本万国博覧会（大阪府）	テーマ「人類の進歩と調和」
1971年	ブタペスト国際狩猟博覧会（ハンガリー）	
1974年	スポーケン国際環境博覧会(アメリカ)	テーマ「汚染なき進歩」
1975年	沖縄国際海洋博覧会（沖縄県）	テーマ「海、その望ましい未来」
1981年	プロブディフ国際博覧会(ブルガリア)	テーマ「狩猟、漁労と人間社会」
1982年	ノックスビル国際エネルギー博覧会(アメリカ)	テーマ「エネルギーは世界の原動□ 」
1984年	ニューオリンズ国際河川博覧会(アメリカ)	テーマ「川の世界、水は命の源」

1985年	国際科学技術博覧会（茨城県）	テーマ「人間・居住・環境と科学技術」
	プロブディフ国際博覧会(ブルガリア)	テーマ「若い発明者の業績」
1986年	バンクーバー国際交通博覧会(カナダ)	テーマ「動く世界、触れ合う世界」
1988年	ブリスベン国際レジャー博覧会(オーストラリア)	テーマ「技術時代のレジャー」
1990年	国際花と緑の博覧会(大阪府)	テーマ「自然と人間の共生」
1991年	プロブディフ国際博覧会(ブルガリア)	テーマ「平和な世界のための若者の活動」
1992年	セビリア万国博覧会(スペイン)	テーマ「発□ の時代」
	ジェノヴァ国際船と海の博覧会(イタリア)	アメリカ□ 陸発□ 500 周年
1993年	大田国際博覧会(韓国)	テーマ「新しい跳躍への道」
1994年	**「地球的課題解決の場」とする BIE 総会決議**	
1998年	リスボン国際博覧会(ポルトガル)	テーマ「海、未来への遺産」
2000年	ハノーバー万国博覧会(ドイツ)	テーマ「人間・自然・技術」
2005年	2005 年□ 本国際博覧会(愛知県)	テーマ「自然の叡智」
2008年	サラゴサ国際博覧会（スペイン）	テーマ「水と持続可能な開発」
2010年	上海世界博覧会(中国)	テーマ「より良い都市、より良い□ 活」
2012年	麗□ 国際博覧会(韓国)	テーマ「生きている海と沿岸」
2015年	ミラノ万国博覧会(イタリア)	テーマ「地球に□ 料を、□ 命にエネルギーを」
2017年	アスタナ国際博覧会(カザフスタン)	テーマ「未来のエネルギー」
2020年	ドバイ国際博覧会(アラブ□ □ 国連邦)	テーマ「心を繋ぎ、未来を創る」

４．２０２５年国際博覧会の展開事例集

ライフ	
万博婚	数千万人が来場する万博で、遺伝子データを活用したマッチングなど、新しい出会いを応援する。また、万博会場で、結婚式をあげることも可能とし、幸せを来場者にお裾分けする。
自分が望む未来のライフスタイルを考え、体験する	自分が死ぬ直前を想定して、遺書をしたため棺桶に入り自分の過去や生き方を回想する。その後、人生において大きな割合を占める、「仕事」「学び」「遊び」などについて、未来の在り方を体験。例えば、拡張現実（AR）や仮想現実（VR）を活用して、楽しんで取り組むことができる仕事を体験し、自分が欲しいノウハウを個人に最適化された学習方法で学び、他国特有のアクティビティなど「遊び」を楽しむ。最後に、明るさ・浮遊感などについて子宮を模したカプセル型入浴装置に入り、短時間で疲労を癒やせる成分のお湯に浸かって、生きる喜びに浸りながら疲れた身体を癒やす。
ワークライフハーモニー	日本では、職業と人格が一致していた。仕事は苦役として捉えるのではなく、社会・他社への貢献と捉え、仕事と生活をトレードオフに考えるワークライフバランスではなく、両者の調和を実現したワークライフハーモニーを目指す。
三種の神技	モノ消費からコト消費に大きく転換してきた昨今、本当に豊かな人が手にしているのは、創造的に働くこと・楽しく遊ぶこと・心身共に健康を維持することの3つではないだろうか。来場者は様々なアクティビティを通じて、その重要性や方法論を学び、会期後も継続的に努力することで、これらの三種の神技を真に手に入れることができる。
Uterus - pia	チベット仏教・キリスト教では、人類の原初的な衝動の一つとして胎内回帰が挙げられ、住居・建築に幅広く取り入れられている。大阪湾の海水を原料とした羊水が、子宮を模したカプセル型入浴装置“Uterus－pia” に満たされる。カプセル内の明るさ、大きさ、浮遊感は胎児に対する子宮を再現。体験者は、陸上で必要であった一切の衣服から解放され、人類共通の安らぎを得るだろう。
HELLive	死後の世界に対する思いは文化を超えて共通している部分がある。生への執着や罪悪はドロドロとした「地獄」観を人々の心の中に渦巻かせてきた。音楽フェス“HELLive”では、センセーショナルな外観と複雑な内的世界観で人々の心を離さない「地獄」と、時に理性を超えて脳髄に届く「音楽」とを掛け合わせ、死と生から遠ざかった現代人の心に轟音をぶつける。さあ、地獄を謳歌する準備はできたか。
Questions＝100×（Life＋Death）×Art ～ 生死100 問答～	「どうして人を殺してはいけないのですか」「人間は何のために生きているのですか」「死んだらどこに行くのですか」― 「生と死」は人間に問いを与え続けてきた。ここでは「尖った」若手アーティスト精鋭100 名による「生と死」にまつわる100 のエキシビジョンが行われる。与えられたものは自分と「アート」のみ。物言わぬ生は、死は。一体どこから来てどこに向かって行くのだろうか。

辞世の書	「明日、自分が死ぬとしたら何を書き残しますか？」来場者は自身の半生を振り返り、電子ペーパー上に「辞世の書」を認める（したためる）ことができる。「辞世の書」のデータは電子データとしてクラウド上に保存され、必要な時にアクセスすることができる。問いを通して、人は有限の「生」に自ら気づいていく。
In the Coffin Black	死生学の開拓者“Philippe Ariès” によれば、「人間は死者を埋葬する唯一の動物」である。人類は死者を畏敬の念をもって棺に納める。体験型パビリオン“In the Coffin Black” では、来場者自ら棺の暗黒へと一人入り込むことで、身を以て「死」を体感する。 「死」の象徴としての棺から外に出た時、来場者は今まで感じることのなかった「生」が世界に溢れていることに気づくであろう。
執行の日	5人ずつ通された部屋のモニターには静かに動画が再生される。重大な罪を犯した死刑囚の半生がそこでは描かれる。動画が終わった後、通された五人は、各々で一つずつ設置されたボタンのそばにたつ。合図とともにボタンを押すと「ガコン」と音がなり事は終わる。死刑制度によって私たちは公的に死を与えることができる。しかし、私たちはその事実に対しあまりに無頓着だ。「執行の日」では万博史上最も重く、そして最もセンセーショナルに「死刑」が問われる。
覚悟の手紙	「父ハスガタコソミエザルモイツデモオマエタチヲ見テイル」これは神風特攻隊で無くなった中尉が幼い子供へ送った手紙である。第二次世界大戦時、日本にはまさに“決死” の覚悟で亡くなっていく人たちがいた。 彼らは戦争の最中、避けられない死を前に、誰に何を伝えたのか。彼らが残した最後の手記、家族への手紙を展示する。
集まれ！万博Babies ！	赤ちゃん、それは「生」の象徴である。「生」であふれる万博に。乳幼児来場者数が来場者全体の5%を超えることを目標に、乳児を預かれる来場者専用の託児所、授乳スペースを完備。また、赤ちゃんを連れた家族には親の傍を自動で並走する電動ベビーカーを貸し出す。更には、万博開催に合わせ、大阪府内に「万博保育園」を設置し、万博の収益の一部を、保育園に寄付できる仕組みをつくる。医療的ケア児の受け入れ体制の充実など、すべての赤ちゃんに優しい大阪を目指す。
“Memento Mori”～死を記憶せよ～	自分がいつか必ず死ぬことを忘れてはいないか。皮肉にも人間が「生」を感じるのは、「死」を身近に感じる瞬間であることが多い。自らの「死」が迫るその瞬間、「生きねば」という生存本能が掻き立てられる。“Memento Mori” は万博内に建てられた「天国の塔」からバンジージャンプすることで、人間が潜在的に有する「死」へのアラートを呼び起こし、「生」への強い志向性を惹起するというエンターテイメント型パビリオンである。
私だけがいない世界	「もし、自分が死んだ後の世界を覗けたら？」一ごく普通の生活を送る主人公の「私」は、スクリーン上で突如、死んでしまう。 「私」は死の直後からゆっくりと「天国の塔」を昇天してゆく。そこで見た「私だけがいない世界」は、「私」がいなくなった後も変わらず回り続けており、「私」はただただ呆然とそれを見つめることしかできないのであった。と、その瞬間視界が暗転し、高さ100mからフリーフォ

	ール。現世に戻ってきたとき「私」は再び日常を歩み出す。生を実感しながら。
Chasm	瞳孔散大、呼吸停止、心停止、これを死の三兆候とよぶ。我々はこれを以て「死」とみなすが、生死の狭間には何がおこるのであろうか。死の近傍の感覚。臨死体験には共通している体験がある。暗闇のトンネルに落ちていく、光の玉を見る、走馬灯と言われる一生の出来事を思い出す、などである。最新のVR 技術を用いて、この仮死状態を再現し、生と死の隙間を体験することで、「死」はまったく別の様相を呈する。
夢洲牧場	死は隠されている。少し前の日本の様に庭先でニワトリを飼い、締め殺して食べることもない。核家族化、長寿の時代で若者は身近な家族の死さえも体験することが少なくなっている。生活の裏で死が行われ、目に触れることがない。万博会場である夢洲に作られた夢洲牧場ではニワトリ、牛、豚などを飼育し、学生を中心とする青年が屠殺を体験し、生物を殺すことで生、死を実感できる。屠殺された動物は万博食堂で振舞われる。
節なき不死	秦国の始皇帝は不老不死を求めたが、それを「辰砂」(水銀)に求め死亡したと言われている。竹取物語で将軍はかぐや姫がいない人生に意味はないと不死の薬を焼き払った。不死への思いは遥昔から存在するようである。刺胞動物であるベニクラゲは生活環を逆回転させることにより不死を実現している。「大阪海底水族館」にてベニクラゲの展示行い、際限ない寿命、不死に対して思いを馳せる5 分間を演出する。
黄泉列車「たそがれ」	夢洲に向けて、大阪市内から万博直通の鉄道が敷設されている。ここを通る黄泉列車「たそがれ」には、座席一つ一つにAR ゴーグルが設置されている。これを装着し、車窓から外の世界を眺めると、そこにはなんと、「黄泉の世界」が広がっているのであった。各国の神話や様々な宗教を通して人間がこれまで想像の世界で描いてきた「死後の世界」が、AR 技術によって万博到着までの現実風景に重ね合わせられ、人の生を問う万博の幕が開かれる。
赤ちゃんエキスポスト	100 年前は子供は「授かる」ものであった。家族計画により子供を「作る」時代になり、近年、自身の自由が尊重される時代になって、子供は「できちゃった」ものであるとすら言われることもある。生まれてきたかけがえのない命を守るため、全国から育てられない子供を一挙に引き取る「赤ちゃんエキスポスト」を設立。子供を育ててくれる関西の里親を募集。特別養子縁組制度を関西で促進させると同時に、「望まれない命」が無くなる未来を実現する。
BAR “Silver Ages”	パビリオンの一角にあるBAR “Silver Ages”. このBAR の従業員には採用条件が二つある。65 歳以上であること、お客様に大人の余裕を演出できること。思春期の悩みを抱えた青年、子育てにつかれた母親、ただ死を待つだけだというおばあちゃん。生きるも苦し、死ぬも苦しと悩みを持つ人々はその胸の内を赤裸々に語る。果たして「老いる」とは引き算なのか、それとも足し算なのか。老バーテンはいつもこちらに微笑みを返すのである。

EXPO mother and babies hospitel	安全な出産のためのケアは整っているのに対し、産後の子育ての苦労を支えるケアはまだ十分とは言い難い。万博会場内に産後ケア施設“EXPO mother and babies hospitel” を作り、生まれたばかりの子供を預け、産後子育てをしている母親が、子育てから離れ、家族と食事を楽しんだり、自分自身の時間を過ごせるようにする。愛してやまない我が子でも、時には少しはなれて息をつきたい時がある。負担のない、幸せな子育てを支援する。
死生観会議 On Air	この世には生と死に精通している様々な職業が存在している。医師・看護師・助産師をはじめとした生に携わる人々と、僧侶・葬儀者のような死に携わる人々が集い、「人はなぜ生きるのか」をテーマに大討論会「死生観会議 On Air」を行う。その様子は、オンラインで世界中に配信され、世界中からコメントが寄せられる。生と死の専門家が、21 世紀の「真に生きる意味」を語り尽くす。
後悔先にたつ	人は死を目前にした時、どんな後悔を口にするのだろう。終末期患者への事前調査にて人生への後悔をまとめ、成し遂げたかった思いを、ドキュメンタリー映画として撮影する。パビリオン、万博内のホテルで放映された映画は、悔い無き人生へと人々を駆り立てる原動力となる。「誰もが持ちうるが、誰もかなえることができない」最期の後悔を、今、見つめ直す。
生誕の小径	胎内で育った生は須らく一つの体験を行う。母親の子宮という絶対的庇護を抜け、下界に投げ出される「産道通過」である。胎児は一切の光を許さない暗闇を理由もわからず進まされ、自分の意志とは無関係に命をもって産み落とされるのだ。「生誕の小径」は直径わずか80cm、長さ20m の無明の産道を模した滑り台型バルーントンネルである。来場者はトンネル内腔を滑り進むことで、理由なき自分の出生に気が付くのである。
What ' s gender got to do with marriage.	結婚するのに、性別なんて関係ない。愛しているから結婚するんだ。大阪に「LGBT 結婚特区」を設定し、LGBT の人々の結婚を認め、応援していく。万博会場内にも結婚式場を作って、LGBT の人々が挙式できるようにし、万博開催後もLGBT 結婚を応援する結婚式場として残しておく。差別や偏見のない大阪を目指して、制度面での革新を。
Be A Woman !	女性にしか分からない生理痛の辛さ、陣痛の痛み、出産の大変さ。生理中の気だるさを体感する「生理体験シート」、電極を流して陣痛の痛みを再現する「陣痛シミュレーター」や、重さ約15kg のおもりをお腹や胸につける「妊娠体験スーツ」を万博内に用意。女性にしか分からない生理、陣痛や出産の大変さを男性にも体験してもらう。男女の壁が少しでも取り払われることを願って。
Stand By Me	人は一人では生きてはいけない。社会で生きていく私たちは相互扶助の精神を持ち、公的サービスに依存するのではなく、自分たちの健康は自分自身で、またはお互いで、守っていかなくてはいけない。 共助拡大プラン“Stand By Me” では会場スタッフは全員、BLS 講習、防災訓練を受け、人が倒れた時や災害時に、的確な判断と行動で人命を救助できるようにする取り組みである。お互いがお互いを支え合う、そんな世界を、共につくろう。
世界葬儀社	宗教の違いはお葬式に出る。世界の葬儀体験とともに、自分が参列者、見送られる側、喪

	主（ホスト）を体感できる空間を作る。
生まれる瞬間の体感	お食い初め、ベビーシャワーなど世界各地にある様々な出産・子育ての習慣を体験。また、男性も子どもを産む瞬間を体感できる。また、2025年に生まれた赤ちゃんの写真を集めて展示する。
幸せ時計	幸せは人それぞれ。食、エンタメ、スポーツ、ゲーム、旅行、愛、社会貢献等、人間を幸せにしうる様々なコンテンツを来場者が体験し、自分の幸せへの影響度合いを計測することで、自分が何に幸せを感じるか知ることができる。
シニア世代の皆さん、力を貸してください！	定年退職した後もまだまだ元気なシニア世代の皆さん、ぜひ力を貸してください！シニア世代の先輩たちに、万博のシニアボランティアとして活躍してもらおう。1970　年の大阪万博の熱狂を知っているシニア世代も多いはず。そんなシニア世代のエネルギーを取り込み、万博を盛り上げていこう。
人・街・生命を育む	閉塞感が漂う現在、我々が求めているのは、成長ではないだろうか。ワークショップ等を通じて、来場者が自らのスキルを磨くとともに、他の来場者と共創することでチームワーク力を強化する。夢洲は現在、ほぼ更地であるため、様々な社会実験を行い、新しい都市モデルの構築が可能となる。先進事例を日本各地の都市に適用することで、街を育てていく。また、動植物を育て、食べるプロセスまでを体験することで、命の尊さを学ぶ。
未来型結婚ビジネスの模索	人と人のより良いパートナー選びの可能性をAIなどハイテクを駆使しサポート。地球の裏側遠距離結婚や、パビリオン結婚式など離婚式など、新婚婚ビジネスを模索。「縁むすび」日本のブランドを確立し、企業取引・国際政治等にも応用。
住	
初対面の人達と遊び、住める万博	来場者は簡単な性格診断の後に、勇者、魔法使い、医者などの仮想のキャラクター及びコスプレ衣装をあてがわれる。初対面の人とグループを組むことで有利に各種イベントを進めるようにすることで、新たな気づきが得られる出会いを演出する。また、多種多様な民族の男女が一つ屋根の下で一定期間住むことができる住環境を万博内に設定する。そこでは、異文化の人々が織りなすドラマが繰り広げられ、それはドキュメンタリーとして放映される。
コネクテッドハウス「MIRAIE（未来家）」	IoT　やセンサリング技術の進歩により、家とその住人が丸ごとインターネットでつながる時代は目前に迫っている。会場に展示されたモデルハウス「MIRAIE」は、一人暮らしの高齢者向けに作られたつなぎ変え自由の家。「外出時鍵を閉めると、火元の確認を自動でしてくれる。」「朝目覚ましを止めると、食卓でドリップコーヒーが入る。」年をとれば、できないこと、面倒くさいことが増えてくるのはあたりまえ。それに合わせて、若者がICT　の力で柔軟にサポートする。そんな共創ありじゃない？
万博EXTRA－Resort	高齢者が安心して、思いっきり楽しみながら暮らせるようにする。「万博EXTRA－Resort」は、介護施設、病院、リゾートカジノを併設した万博内の複合型健康施設。介護保険が適用される介護保険施設と、自費で施設外の人と、カジノを楽しめる施設を。料金・サービス

	体系は柔軟にし、施設に入る人も、施設で働く人も、幸せな気分になれる介護を作り出していく。
エキスポレジデンス	未来の「住」をテーマとした体験型アクティビティとして、パビリオンの中に宿泊できるホテルを設ける。
EXPO DIY Hotel	万博の24 時間開催に当たり、遠方からの来場者に向けて次世代型快眠ホテルが提供される。その名も" EXPO DIY Hotel"。客室内の食器や家具は好みに合わせてオーダーメイド。快適な睡眠のために特に重要な枕やベッドは、体格や好みに合わせて全てその場で3D プリントされる。設計図をダウンロードすれば、家でも3D プリントによる入手が可能となる。"Design It Yourself"。来場者が宿泊そのものを自由に設計し、至高の快適を創り出す時代が到来する。
ワンワールドホテル	世界の人たちとの対話・共感をテーマに掲げ、万博会場内に宿泊・滞在場所を設ける。そこでは、難民キャンプが再現されており、テントやライトなどの必需品を全て買ってもらう。そのお金は、実際に難民キャンプの人々に届くようなシステムにすることで、難民キャンプを体験するだけでなく、同時に寄付も行えるようにする。また、中央に「対話の場」を設ける。そこでは、リアルの場での話だけではなく、オンラインで話した言葉からも絵が描かれるようにする。天井はプラネタリウムとなっており、難民キャンプの人々と空を共有（難民キャンプの星空は美しい）。どうしたら格差はなくなるのかを問う。
食	
The Oldest Tastes	農耕の開始は人類にとって非常に大きな転換点だった。人類は農耕を通して、芳醇な食文化を形成していくのである。古代エジプト文明では農耕で得られた穀物を原料とするパンとビールが食べ物の象徴的存在であった。今なお世界の食文化の中心に位置するパンとビールをはじめ、穀物食が最古の姿で復元され、万博内で振舞われる。幾千年と積み重ねてきた「食べる」という営為の歴史の深みを味わおう。
Osaka EXPO Kitchen	「天下の台所」。江戸時代より商業、物流、人材において日本の中核を担ってきた大坂の愛称である。"Osaka EXPO Kitchen" は万博内の飲食店ルールを指し、「飲食店で提供するメニューは地元大阪で取れたものを必ず使用する」「健康食指標に応じて価格が割引される」など地産地消を目標に、人々に健康的で美味しい食の幸せを共有してゆく。
給食・博	給食。各国の食文化、健康意識、経済状況など、食に関わる様々な要素が詰まっているのが給食ではないだろうか。彩り豊かなフランス、ボリューム満点の南米、お粥だけのスーダン…。会場内で「給食・博」を開き、各国の給食を屋台で売り出す。また、「未来の給食」として、サプリメント給食や昆虫食も販売！？一つとして同じ給食がないことに気がつき、驚くこと間違いなし。
各国の「食文化」の「世界ビジネス化」への支援	世界中の食文化を、日本の融合力で万国に馴染むアレンジを施し、世界にアピール。例えば、各国の自慢の食材を他文化の料理人が調理するコンテストの開催など。日本独特の素材を活かした調理法やAI／ロボットを用いた新たな調理法の披露等。

食のコラボレーション	各国の調理方法と各国の食材を様々に組み合わせることで、新しい食を生み出す。
自然をいただきます	食品の廃棄が問題となる昨今、食品の調達・流通を再考する。来場者は、瀬戸内海や大阪湾から魚を、牧場から畜産物を、農場から野菜を収穫し、その食材の調理から食べるまでを一環して体験する。また、残渣（ざんさ）からは堆肥をつくって活用するなど、持続可能な食の循環について考える。
スポーツ	
万人が楽しめるスポーツ	ベビーバスケットなど運動神経があまり関係のない「ゆるスポ」や仮想空間でのスポーツ対戦、あるいは、オリンピック選手の運動能力をパワードスーツによって完全に再現し、人類最速の100m走が、人類最強のウエイトリフティングが、人類最高難度の体操競技が、パワードスーツを着ることで体験できるコンテンツを提供することで、運動が苦手な人も含めて、皆がスポーツを楽しめるようにする。
Borderless Sports	障害者も健常者も身体差は関係なく楽しめるスポーツ施設を会場内に作る。会場内で楽しめる種目は、車椅子テニスやブラインドサッカーなど、障害がある人にもハンデがないようなものに限り、障害者だけでなく、健常者からも施設を利用できる。身体をフルに使う、スポーツを通してこそ、「人と人との身体の差」があることを認め、互いを理解することができる。
Senior × Youth Campus（SYC）	「学びたい。子どもの時、これを習いたかった。」。高齢者の中には、そんな思いを強く持っている人も多いのではないか。ただ、年齢・体力的に中々手を出せないこともあるはず。そこで、仮想の世界の中で新しいことにチャレンジしてもらう。例えば、360° ハワイの海が映し出された部屋の中。周りの風景が動くことでサーフボードの上に立っているだけでサーフィンが出来ているかのような気分を味わえる。若者が開発したテクノロジーで、高齢者が新たな楽しみ・学びを広げていく。
Happy Walking	総消費カロリーを表示したり、歩数に応じて商品が得られるなど、歩くインセンティブを工夫することで、最も基本的な運動である「歩く」を楽しむ。
健康・医療	
献セル（献Cell）	「献血」ならぬ「献セル（Cell）」。万博内では来場者から細胞が「献セル」（＝細胞の任意提供）され、万能な初期状態に戻すiPS 技術を用いてHLA 型によって分類し、iPS 細胞をストックする。創薬、再生医療の発展、難病の治療など様々なポテンシャルを持つ日本発の技術iPS 細胞を、日本の医療インフラに。 世界中の創薬、再生医療が2025 大阪万博から変わってゆく。
地球規模の医療平等を目指すAR／MR診療所	診療所を規格モジュール化し、AR技術で世界中どこからでも診療可能とする。世界のボランティア医師が途上国等の医師不足地域の患者を無料診断。先進国・発展途上国に限らず世界中の医師が診断する地球的医療平等を目指す。
健康・長寿企業展	健康・長寿は人間だけに大切なことではない。「健康・長寿企業展」を行い、100年企業、健康経営にせまる。

EXPO HEALTHCARE BANK	万博内では日本屈指の最先端テクノロジーが搭載されたIoT デバイス、フットウェア、ファブリックなどが来場者に手渡される。身に着けるすべてのデバイスに来場者3000 万人から時々刻々と得られるバイタルデータを“EXPO HUMAN HEALTH BANK” に蓄積。希望者からは併せてゲノムデータ、疾病情報、行動データも集積し、バイタルデータと紐づける。将来的に各国の研究機関、企業が“EXPO HUMAN HEALTH BANK” にアクセスすることで、史上最大規模の新時代ヘルスケア研究、事業を創出する。
人・体・験	AD150 年頃、ギリシア医学者“Claudius Galenus” は人類最古といわれる解剖学書「人体の諸部分の有用性」を記した。生命の進化の結晶としての人体・自然の神秘の宝庫である人体を知ることは人類にとって必然的欲求である。体験型アトラクション「人・体・験」ではVR 技術を用いて人体の隅々にまで入り込み、「ミクロの決死隊」さながらの臨場感で、人体の秘密に迫る。
調息の間	姿勢を正して呼吸を整える。たったこれだけのシンプルな行為で、私たちは驚くほど精神的な落ち着き、癒しを得ることができる。万博内に芝生広場をつくり、マインドフルネス体験をできるようにする。希望者にはインストラクターによる講習も受けられるようにし、万博で自分にあった「呼吸法」を身につけてもらう。私たちの生を支えている「呼吸」。都会の喧噪を離れ、呼吸を見直すことで、精神的な豊かさを得られるのではないだろうか。
EXPO HealthCare Support	3000 万人の来場が予想されている大阪万博。多数の来場者が集まる会場内で体調を崩す人が出てくるのは必然である。2005 年の愛知万博では、熱中症になった方が313人、心停止状態になった方が3 人いた。大阪万博2025 では来場者全員が、配布されたIoT デバイスを通してモニタリングされ、心停止などおこなったときには、ただちに対応が施される。「万博フリークリニック」では、健康度チェックや、医師による診察が無料で受けられる。来場者全員が健康を達成し、健やかに万博を楽しむことが実現するのである。
万博最先端メディカルセンター	他で手の施しようがないと言われた患者さんが最後に集う場所へ。万博内最先端医療ケア施設「万博先端メディカルセンター」は、難病治療の臨床治験場、最先端医療の集積地となり、難治疾患に立ち向かう。世界から「最後はKANSAI にいくしかない」と言われるほどの医療の国際展開がなされ、医学、医療の限界に挑戦し続ける世界を牽引する医療特化型地域、関西の実現を目指す。
癒しの間	万博は疲れるものという印象があるかもしれない。万博会場で、自己を見つめることができる落ち着いた部屋や、スパ・温浴施設等心身ともに癒やされる空間を提供することで、来場者が癒される万博を実現する。
高額寄付者への魅惑の医療キックバック	世界の高額寄付者にキックバックとして様々なサービスや商品を進呈。例えば日本への航空券と、検査、治療券を送り、日本（関西）での高度医療や精密健診を交通費含め無料で受診可能なサービスを提供。
新たな医療・和食・精神サービスの開発とツーリズ	関西を地域の特徴を活かし、分かりやすくゾーン（街道）に分けプレイアップ。地域毎にそれに合わせたサービスを新規開発し、ツーリズムとして分かりやすく提供。例えば医療ツーリズム、関西食文化の紹介、佗茶や寺社観光等が考えられる。

ムの提供	
余剰医薬品・広告入り健康機材等の困窮地への分配	日本などで処方されたが服用しなかった医薬品等を安価で回収。また、CMの入った血圧計・体温計・消耗品等を企業に無償で提供いただく。世界における上記薬剤や機器のニーズを把握し、必要な地域に配布。
パンデミック早期発見・早期対策情報網の構築	世界中の診療所がパンデミックの兆候等を簡易に発信可能なシステム構築を目指す。集められたBig－Dataは、即座に分析され、道路や空港での対応処置に反映。各国の研究機関が大阪に集合し、具体的な仕組み作りを検討。
途上国等でのバイタルデータ収集と研究実施権の取引き	バイタルデータの収集が可能なウェアラブル端末（健康測定キューブ）を途上国に頒布。医薬品会社がそのデータを活用し、商品開発や、万博での実証プロジェクト等を実施。事後、医薬品やサービス開発等につなげれば、データ提供国には安価で提供する。
世界に売れる途上国の健康食材等　発掘支援プロジェクト	世界に眠れる途上国の健康食材等々を、時間を掛けてJETRO等が発掘等支援。発掘にあたっては、先進国のニーズ等を勘案し、効能アピール方法等も含め支援。博覧会で、各国の健康食材を試食・販売すると共に、世界へのネット販売体制を構築。
学び	
万国“教室”	万博内に一つの学校を作る。その中に世界各国の教室が再現され、その国のユニークな授業を受けることができる。例えば、スウェーデンの教室では、寝転がりながら各々が本を読む。シンガポールの教室ではノーベル賞受賞者が授業をし、フランスの教室にはシェフが現れて食教育をする。世界中の教育のいいところを取り上げ融合する。豊かな教育によって、豊かな人を育んでいく。
L－YAP “Local Young Action Project”	都会に住む、中学生、高校生は地域の大人達に助けられた経験が少ないように思われる。それが地域への愛着を持てないことにつながり、地域から離れていくことにつながっている。“L－YAP” では中学、高校のカリキュラムに、地域の大人に助けられながら課題解決を行っていくプログラムを導入。子供達は社会の仕組みや責任感ある行動を身を以て学ぶとともに、地域のかっこいい大人にあこがれる。彼らの心に確かに刻み込まれた原体験は、世代を超えた共創精神の萌芽となるだろう。
知の森	生命倫理、社会制度、健康・医療、ライフスタイルなど万博のコンセプトに関係のある議題について、国際会議、学会やワークショップを万博の地で開催する。学者、ビジネスマン、一般市民等が双方向に議論し、知の研鑽を行うとともに、その成果をアーカイブして、後世に残していく。
「知の学校」インターナショナル・フリ	期間中、世界中の子ども達を日本に呼び、無料でホームステイ型万博学校を開催。生命や健康に関する知識だけでなく、地球規模の倫理観も教示。習慣や社会観が違う学生が

ースクールの開催	互いに理解しあい、将来に向けてのネットワークを構築、
考え、行動を変えるほどのインパクトを与える万博。	痩せたい、メンタルを強くしたい、たばこをやめたい、スポーツを習慣化したいなど、なりたい自分を思い描き、実現するための刺激的なカリキュラムを受けて、行動を変えていく。自分を変えたい人がカリキュラムをこなすことで、新しい自分に生まれ変われる。
文化・芸術	
Techditional	伝統芸能なんてもう古いという若者。テクノポップなんて音楽じゃないというお年寄り。古い芸術、新しい芸術、という二極的な枠組みはもう捨てて、これからは伝統芸能と最先端の技術を組み合わせた、融合的な芸術が発展していく。例えば、アフリカの伝統芸能にテクノポップが組み合わさったら？茶道具が3D プリンターとレーザーカッターを組み合わせて作られたら？万博会場では、最新アートと伝統芸能のコラボレーション展示会が行われ、新たな歴史が生まれる。
はじまりの木	人類はどこから来て、どこへ向かうのか。この謎を解き明かすため、博物学や分類学といった学問が誕生した。こうした学問が発展し、進化の過程は一つの概念的な樹—系統樹—として表現されるようになる。人類が始まるまでの系統樹を、高さ25mのサイズで完全再現した「はじまりの木」は、役目を終えた廃木材を木材液化技術によって樹脂として再生利用し、その樹脂をもって創られる。「はじまりの木」は、すべての生物のメモリアルとして天高くそびえ立つ。
Air Graffiti	覆面芸術家“Banksy” は落書き（グラフ）こそ不特定多数に向けて表現できる唯一の手段であり、民主主義的である、と唱える。万博内では、空中に落書きするための指装着型スタイラスを体験できる。落書きは空中にポストでき、来場者に配られた拡張現実（AR）ゴーグルによって自由に閲覧できる。無限のスペースに、自分の考えていることが自由に表現でき、他の人と見せあえる。そんな豊かさが万博の宙に浮かぶ。
World Dance Fusions	チャイコフスキー三大バレエの一つ「くるみ割り人形」の第2 幕では、バレエ以外の各国土着の民族舞踊「キャラクターダンス」が舞台のスパイスとして取り入れられている。舞台“World Dance Fusions” では世界各国の民族舞踊を2 種類ずつ掛け合わせ新たな舞踊の可能性に挑戦する。「マオリ族ハカ× 徳島阿波踊り」「Ballet× サンバ」「エイサー× タップダンス」・・・ダンサーたちはダンス留学に行き、真の舞踊文化の融合のため一年間互いの文化を学びあう。フィナーレでは、ダンサー全員が圧巻の群舞により人々を感動の渦に巻き込んでゆく。
EXPO Collection「スポコレ」	世界には数え切れないほどの民族衣装がある。万博で各国の民族衣装を中心としたファッションショー「スポコレ」を開催する。次々と披露される民族衣装をみながら、観客はお気に入りの民族衣装をその場で注文することができる。メキシコのハットとベトナムのアオザイを買って組み合わせるなど、観客の力でコーディネートは民族を超え、無限に広がっていく。

私にしか、できないこと。	人は皆、それぞれの世界観を持っている。同じものを見て、聞き、触れていても、その感じ方は人によって様々で、またその表現の仕方も異なる。自閉症スペクトラムを持つ人の中には、サヴァン症候群と呼ばれる症状を呈する人がいる。その中には、優れた芸術感覚を持ち、自分が感じた世界を音楽や絵画を通して巧みに表現する人もいる。万博内で、彼らの芸術作品を展示し、自閉症の人々がもつ世界観を体感する。彼らにしか表現できない世界の新たなる姿は、来場者から形容する言葉を奪うだろう。
日本文化体験型ホームステイ受け入れ	日本の生活文化に興味を持つ外国人を、ホームステイとして万博期間中受け入れ。滞在費は、お布施のように個人の「任意額」とするなど、日本的曖昧文化も体験。万博だけでなく、日本の神秘的文化や気遣い等の人間の関係性をも体感いただく。
ヒーローアニメによる夢洲の聖地化／萌えキャラビジネス展開	関西／夢洲を舞台とし人類の命をテーマとした若きアニメクリエイターの作品を募集。優秀作品は公的機関や民間が支援し、夢洲の聖地化を促しグッズを販売。また萌キャラを国別の好みを反映し多種制作、ファッション業界等との連携にも発展。
初対面の人達で住める万博	多種多様な民族の男女が一つ屋根の下で一定期間住むことができる住環境を万博内に設定する。そこでは、異文化の男女が織りなすドラマが繰り広げられ、それはドキュメンタリーとして放映される。
異文化交流	地球上のありとあらゆる人の相互理解を図るため、幸せ、美しさなどに関する価値観をお互いに示し、対話する。また、様々な国の日常生活や教育を体験する。体験に際しては、視覚のみならず、五感全てで体感できるように、匂い、温度、湿度、風なども再現する。
様々な価値に触れる万博	各国の様々な価値に触れ、融合させる。例えば、アフリカの民族衣装を着ながら、和室で、カレーを食べるなど。
歌おう、感じよう	来場者や世界各国の人々が同じ曲を歌い、それらを集めて統合し、閉会式で合唱する。また、偶然居合わせた人たちが一緒に合唱するブースを設ける。言葉は通じなくても、一緒に歌うことで連帯感や高揚感を得る。
伝統工芸とのふれあい	人間国宝の作品は技術と人間味の融合。万博会場において、実物を見て、触り、使い、感動する機会を設ける。また、どうしても来場できない人に対しても、仮想現実（VR）などを活用して、なるべく実物に近い形で感動を味わえるようにする。
万博音頭2025	1970年大阪万博では三波春夫作の万博音頭が一世を風靡したが、2025年万博でもテーマソングを作り、気運醸成を図る。万博音頭2025は、万博後も「思い出」として人々の記憶の中に刻まれるだろう。
Make Art	芸術は鑑賞するものという認識を持つ人も多いが、万博では芸術を生み出すことを来場者に楽しんで貰う。その際に、プロのアーティストと来場者がともに作品を作り上げていく。例えば、偶然居合わせた来場者達が数十人で歌い、踊り、楽しい時間を共有することも良いだろう。

世界の民族音楽を活用した集金システム	世界共通のハッピーになる言語である「音楽」をテーマに、新発想ビジネスを展開。例えば、知られざる世界の各国のリズム・メロディ・音源から、様々に楽曲を制作し販売。入場者が奏でる音は万博メモリアルとして販売し、チャリティとして世界に分配。
“神” 芝居	人類は森羅万象に様々な認識と解釈を加え、神話を語り継いできた。神話は各国独自の世界観と宗教観を反映し、それぞれの文化圏で根強く伝承されている。「“神” 芝居」では、万博に訪れた子供たちに、世界の神話を、日本独自で発展させてきた紙芝居形式で伝える。 子供たちに、人類がこれまで語り継いできた、形而上学的深淵を体感してもらう。
美博	「美」は人生を彩る。美の体現に欠かせないファッション、理美容等について、世界各国の伝統的な文化・手法等を紹介するとともに、IoT等の最新技術を取り入れ、個人に最適化されたファッション、理美容を提供する。
エンタメ	
アゲプレ	「感染症との闘い」—人類は幾度となく危急存亡をかけて、この課題に立ち向かってきた。バイオパンデミックシミュレーションゲーム“Against Plagues”（通称アゲプレ）では、パビリオン内に設置されたゲームブースに入り、パンデミックによる人類滅亡を狙う“Plagues”と、それを阻止し、人類を救う“Defenders” に分かれ、対戦を行う。地球上を舞台に種の保存をかけて人類と病原性微生物が鎬を削る。細菌研究者たちの協力を得ながら、人類は生き残ることができるのであろうか。
Shall We ZUKKOKE？	誰かがボケたときに周りの人が倒れ込む、いわゆる「ZUKKOKE」文化は大阪に特有であり、関西定番のリアクションとして有名である。一時間毎に流れる関西人には耳馴染みの深い ” Somebody Stole My Gal ” に乗せ、会場内に特設されたステージ上に来場者に上がってもらい、ZUKKOKE を体験してもらう。皆が同じタイミングでZUKKOKEをすることで、国籍、人種、性別を超えて心のつながりが生まれる。笑い無くして豊かな人生？なんでやねん！
かお・かわる きもち・つながる	悲しい顔の人を見ると、なんだか悲しくなる。笑っている人を見ると、なんだか私も嬉しくなる。 人は“顔” を通して、相手の気持ちを理解する。モブシーンスキルを使って、自分の顔と人種が違う人の顔を合成し、あたかも自分が他人種になったような体験をする。例えば、もしも自分がインド人だったら、こういう顔で、笑うとこんな表情になるんだ。他人種の人の気持ち、ちょっと分かった気がする。
世界お笑いグランプリ	世界各国のお笑いを集めてグランプリを開催。全世界で開催前に予選を行い、勝ち抜いた人が関西地域の色々な地域で行われる本選に参加。地域の人も世界の笑いの文化に触れられる。そして、決勝戦は万博会場で実施。そして、人々は笑いで心を癒やす。
3000万人で創る映画	万博来場者全員（約3000万人）が出演する映画を制作。万博来場者＝映画出演者＝映画の観客となることが期待され、大ヒット間違いなし。例えば怪獣が万博会場を破壊するという設定で、来場者がパビリオンを巡っていく中で「群衆のシーン」「逃げまどうシーン」など

	が勝手に撮影されており、来場者が必ず映り込んでいる。
超脱出万博～「笑顔」にならないと帰れない？？～	来場者全員に喜怒哀楽指数が表示されるツール＆アプリを配付。アプリ上では、行き交う他の来場者の喜怒哀楽指数も確認可能。「楽しい」「笑顔」の状態ではない人に話しかけ、その人を笑わせ、楽しい気持ちにすれば「スマイルポイント」をゲット。スマイルポイントが一定数貯まるまでは帰れないようにするなど。
世界お笑い辞典	劇場を作って各国における笑い（面白いというもの）をライブで見る。それに対しての感想はオンラインで投稿も可能にする。またそれらは全世界に配信。また各国のいたずら（黒板消しを落とす等）を集めて、視聴可能にする。各国ごとに価値観がちがうため面白い。
技術	
ロボット活躍する万博×待ち時間ゼロの万博	日本のアニメ等のキャラクターを模したAI搭載ロボットが清掃、飲食販売、ガイド、来場者の荷物運搬など様々なサービスを担う。ロボットなので多少失敗しても良いことを前提にした時間や空間とする。また、ロボットが来場者に空いているパビリオンを紹介したり、待っている間も楽しめるコンテンツ（ロボットによるパレード等）を提供する。またドローンが荷物を運んでくれ、お土産などの荷物からも解放される。さらにパビリオンごとに事前に観覧予約を受け付けて時間が近づくと来場者に知らせるシステムにより「待たない博覧会」を実現。
EXPO コンシェルジュ	パビリオンを紹介する人工知能搭載ロボット“EXPO コンシェルジュ” が来場者1 人1人にお供する。「ヒト型」「アニマル型」「音声型」の三種類から自由に選べ、それぞれ特徴的な性向で来場者を案内。人工知能には人間とのやり取りが蓄積されガイドは高度に洗練されてゆく。快適に万博を楽しんでいただけるだけなく、 人類は自身の高度発展に不可欠な「コミュニケーション」を、ロボットという写し鏡によって理解してゆく。
The AI Museum	パビリオン“The AI Museum” では、様々な人々の芸術的営為を読み込ませた人工知能The AI Artist “Pierre” がたった「一人」で個展を開催。 巨匠の不朽の名作からストリートアートまで、あらゆる作品を取り込んだPierre は何を描くのか。 『アナタタチニトッテノ「本物の人間らしさ」トハナンデスカ。』人工知能からの挑戦状が静かにたたきつけられる。
人工知能は人間を超えるのか	2018 年には人工知能が人類を超える。しかし認知機能だけは人類を超えられないのではないか。メモリー情報をコア同士の電気シグナルのやり取りで処理することで、ニューロンネットワークが発達した人間の脳を再現する。 その脳型コンピュータに来場者が語りかけ会話をすることで、コンピュータは人間の常識を身につけ、 人の気持ちを理解するようになる。人工知能は本当に人類を超えるのか、万博で実験する。

最 - SAI -	「人間の限界とはいかなるものであろうか」ーー。BC776 年、記録史上最古の古代オリンピックが開催されて以来、人類はこの問いに己の肉体をもって答え続けてきた。本パビリオン「最 - SAI - 」では、オリンピック選手の運動能力をパワードスーツによって完全再現。人類最速の100m 走が、人類最強のウエイトリフティングが、人類最高難度の体操競技が、パワードスーツを着ることですべて体感できる。人類の“最”、とくと体感せよ。
EXPO 未来Lab	「それでも地球は回っている」。1633 年 " Galileo Galilei " はこうつぶやいた。自然界に理性を掛け合わせ、説明を試みる近代科学は人類を今日まで発展させてきた。“EXPO 未来Lab” では、市民による実験体験と専門職による研究が同時に行われることで、ブラックボックス化されがちな科学技術の可視化と近代科学の価値の再考がなされる。また、世界有数の関西主要研究機関との連携を強固にし、関西が世界の科学拠点地区としてのポテンシャルを持つことを世界にアピールする。
Virtual Imaging Mirrors	インターネットの発明は、ネット上にもう一人の「自分」を生み出した。人工知能の発達で、自分が選択する前に先回りするバーチャルな「自分」と人類はこれから対峙していかなくてはならない。“Virtual Imaging Mirrors” は、自己とは何かを問う鏡である。ただ光を反射するだけではない。音声入力と、鏡上部のカメラでもう一人の「あなた」を鏡の中に複製する。大きな姿見に映し出された等身大のあなたは、問う。「やあ、『鏡の外の』僕。元気かい？」
ぬくもりホッとライン	家族を養うため、夢を追いかけるため・・・。 私たちは様々な理由で家族や恋人、友人たちと離れて暮らすことが多くなった。 「ぬくもりホッとライン」は万博内に離れて2つ存在し、それぞれに来場した者同士が繋がることができる。ホログラムなど最新技術を使い、互いに相手の姿、声、匂い、温もりまで伝わり、あたかもそこにいるかのように感じられる。離れていても大切な人とのつながりを感じられるようになるのだ。
空～KU～	ペンと紙。モニターとキーボード。スタイラスとタブレット。思考を留める道具を発明してきた人間は、さらなる豊かさと快適さを求め、道具を「無くす」技術を発明する。直感型デバイス「空～KU～」は、従来型の道具と一線を画す直感型UIで本体を非顕在化し、より快適にデジタル世界にアクセスできる。画面やボタンに制限されたコミュニケーションから解放され、物理的制約を超越することで人間の豊かさはさらなる進展を遂げる。
Never－Flying Toilets	“Flying Toilets” とは、スラム地域などで、路上に放り投げ放置される排便を指し、途上国では衛生状態の悪化、悪臭等の問題を引き起こす。下水処理機能のないスラムでは電力、水資源を使わず、病原菌を殺菌できる持続可能な汚物処理が必要となる。万博に向けて、持続可能なエコトイレの開発をおこない、万博内のトイレとして導入する。 日本の技術は、世界の衛生状態の改善にきっと貢献できるはずだ。

EXPO Seamlessl Pass System	「人類の辛抱と長蛇」と揶揄された大阪万博’70。せっかく万博に来たのに大混雑で、パビリオンに入れないなんて、やってられない。パビリオン入場の予約はすべてオンラインで行われ、入場時間が近づくと、自動通知が来るので、行列に並ぶ必要はなくなる。レストラン、グッズショップにレジはなく、買い物かごに入れるだけで自動的に課金される。 人と人とが無秩序に折り重なる混雑から解放された生活は、私たちにかつてない心の豊かさを与えるだろう。
Transvision	全ての人が会場まで足を運べるわけではない。障害を抱えている人、寝たきりの人、人混みが怖くて近づけない人。その様な人たちには、ヘッドマウントディスプレイを被っている万博会場内の人の視点にJACK－IN し、家や病院にいながらも、来場者の視点からみた万博の風景を楽しんでもらう。病気や障害に合わせた新しい参加の方法を創り出していく。多様な人が参加してこそ、万博は盛り上がる。
バイリングラス	人と人とのコミュニケーションに不可欠となる言語。伝えたいこと、話したいことはあるのに、言語が異なるためにうまくコミュニケーションをとれない、というのは珍しいことではない。万博会場では、出会った異なる言語を話す2人が、メガネ型ウェアラブル端末「バイリングラス」を装着するだけで簡単に会話を楽しめる。「バイリングラス」には話者の言語に対応した同時通訳アプリが搭載されており、2つの言語を瞬時に翻訳される。
年の功vs 若気の至り	高齢者の口からは「最近の若者は、」、また若者からは「これだから老人の古い考え方は、」。 今日こそ、その議論に決着をつけよう！…ダンスで。 —高齢者TEAM はパワードスーツに身を包み、若者TEAM は若き肉体そのままで、ヒップホップやブレイクダンスといったダンスに挑戦し、どちらが優れているかの真剣勝負を行う。若者は「若気の至り」から粗削りで力強く、高齢者は「年の功」を生かしたユーモア溢れる演技を行う。コンテストを通じ、目標に一心不乱に努力する両世代を見て、万博はさらに全世代を元気づけてゆく。
The Meisters’ Sou	日本の小さな町工場が、今日まで絶やすことなく伝承し続けてきた日本の宝ともいえる技術がある。熟練工の有する、「職人技」である。“The Meisters’ Soul” では、日本刀研磨などといった、我が国が誇る熟練工の技術をパフォーマンス披露し、世界中からの来場者に対してアピールする。同時に、披露された後世に残すべき熟練工のノウハウをIT技術を駆使してデジタル化することによって、業務プロセスやシステムに展開し、非構造化データのIT 継承へと繋げる。
Better Life From Data	ウェアラブルデバイスや非接触センサー技術等を活用して来場者のデータを取得し、個人に合わせたパーソナルケアや食事等を提供する。
人民の、ロボットによる、人民のための街	昼は人間のスタッフが来場者をもてなすが、夜は会場案内や各種サービス提供を完全にAI・ロボットのみが提供する。そのロボットは日本のアニメ等のキャラクターを模したものを積極的に登用。また、全てAI・ロボットであるため、失敗（事故等）しても良いことを前提にした時間や空間とする。

人工知能vs人類	人工知能はチェスで人類を打ち負かし、最近はニュース記事を書くまでになった。果たして、人工知能（ロボット含む）はどのような分野まで人類を超えることができるのだろうか。絵画、音楽、お笑い、会計、裁判、医療等の様々な分野で人工知能と人類がアウトプットを競う大会を実施し、AIの可能性と限界を見いだす。
ワザ展	国内外の中小企業や伝統工芸品職人等の巧みのワザ（技術）を実演含めて紹介し、来場者は達人の美技に酔いしれる。
サイバー博における実集客装置としての空想世界のリアル化	次期博は全ての展示やイベントをVR化し、世界中のコンピュータで分散サイバー開催。その際の、関西への実集客装置としてSFやアニメの空想世界をリアルに会場内に実現。バーチャルな世界のリアル化は、会場に来訪しなくては味わえない集客装置となる。
革新的な次世代決済システムの開発とその実証	様々な決済システムを包含する利便性の高い次世代決済システムを開発し実証。例えば、世界の労働・思想・安心なども、同一に金額評価し決済機能に組み込む等。万博から次世代の安全・利便性の高い世界標準共通決済システムのスタートを切る。
バーチャルとコールド・スリープの融合～準不老不死の未来へ～	バーチャル＆コールドスリープ館では、（1）肉体疲労の回復、アロマ、マッサージ、部分温熱、部分冷却（2）催眠誘導、体温を徐々に低下させることで、コールドスリープさせ、元に戻す課程でデータを収集する。その際、任意で血液等様々なものを献体してもらうことで、あたかも老いない、いつまでも健康な準不老不死の未来を体験させる。
匠の館	職人が、匠の技を駆使して、木造の館を建築する。その中では、毎日異なる特定のテーマのもと、匠が製作過程を見せながら芸術作品を作り、競う「匠アートバトル」を行う。バトル後は、参加者も匠に指導を受けながら、様々な芸術作品の創作を体験できる。
環境・エネルギー	
水上帝『ワタツミ』	生態系に甚大な被害をもたらし、海の豊かさを侵害する海洋汚染。日本古来の海神にちなみ、アクア都市「水上帝『ワタツミ』」がその救世主として人と海の共生・海洋環境の矯正を目指す。ワタツミは海底に溜まるゴミを「捕食」し、「体内」で養殖魚の栄養剤、リサイクル燃料として「消化」。生態系の豊かさを願う海神が大阪湾に降臨する。
Steps For Energy	3，000 億歩。3000 万人の来場者が1 万歩歩いた時の合計歩数である。2016 年現在ラスベガスで導入計画がなされている足踏みのエネルギーを電気に変換する「歩行発電」技術によれば、一歩につき4～8W を生産できる。理論上1 兆2000 億～2 兆4000 億W の発電可能になった万博の床から、万博内のLED 街灯に電力供給される。大地を踏みしめる一人一人の力が、万博を照らす光となって降り注ぐ。
鳴門海底発電所	私たちを生んだ母なる海は日々うねりぶつかり合い、潮の流れを作る。日本近海の大動脈ともいえる黒潮が生み出す電力は約1，600 万kw、鳴門海峡に流れこむ海流だけでも、原子力発電1 基分に相当する100 万kW 以上の発電ポテンシャルが見込まれている。「鳴門海底発電所」を試験的に設置し、プロペラ式タービンが鳴門海峡に設置され潮の流れを電力に変換し、万博会場へと供給する。豪然たる潮のうねりは万博の動力の源となるのだ。

Inconveniently Rich Separation	会場にずらりと並ぶ、ゴミ箱。よく見れば一つ一つ違う口の形をしている。万博内デザインの一つである“Inconvenient Separation” は環境保全と現代日本の大量消費に気がつくためにあえて、たくさんの分別を要求するゴミ箱デザインになっている。来場者は地球にやさしい行動の難しさと、大量生産、大量消費社会の現状に知らず知らず気が付いてゆく。
自然	
The Original Landscape	本パビリオン“The Original Landscape” では、巨大ドームにて地球最古の人類“Sahelanthropus tchadensis” が目の当たりにしたであろう700 万年前の拠水林が完全再現されている。原初人類になりきった来場者は樹上アスレチックを駆け巡る事ができる。桁違いのスケールで再現された拠水林に圧倒され、人々は老若男女問わず、人類の原風景の壮大さを目の当たりにするだろう。
絶景SoundScape	想像して欲しい。一切の澱みのない湖面の静けさを。マグマ吹き出す火山の咆哮を。熱帯原生林の生命のコーラスを。拡張現実体験アトラクション「絶景SoundScape」では、日本だけでなく地球全体の絶景に置かれた高性能ビジュアルマイクによって、高解像度の絶景と生の音がそのまま再現される。地球の多様で荒削りな芸術を感じる旅行に、さぁ、出発だ！
Zoom to zoo	空を飛ぶ鷲、南極の海中でハンティングするペンギン。人間とは違う視線、スピード感を持つ動物たちの背中にカメラを搭載し、彼らのリアルな世界を映像におさめ、360° のVR映像を作成する。来場者はその映像をみることで、動物たちの視線にダイブする。多種多様な生物が、毎日見てる世界。私たちの見てる世界と全然違う。地球上の生物多様性を体感して、感動しないわけがない。
Biomimetics Aquarium	水族館に入り、目の前に広がるのは、多種多様な魚や植物たち。その水族館の設計のいたるところにバイオミメティクスの技術が取り入れられている。例えば水族館の電気は、ザトウクジラのヒレからヒントを得た発電機によって生み出され、壁にはハスの葉の撥水効果からヒントを得た防水加工がなされている。生物が長年培ってきた生きる知恵の美しさと力強さに改めて感動する。
自然との共生	都市生活に疲れた人々に自然の中で過ごしてもらうべく、会場内に緑やオアシスを多く配置するとともに、関西全域で自然を楽しむアクティビティを提供。また、風力・太陽光発電など自然に優しい技術を活用して、万博会場を運営していく。
観光	
Around Kansai	来場者は、万博会場で関西や日本各地の歴史、文化、自然、産業を体験することができ、気になった場所があれば、最適な交通・宿泊のチケットがその場で発券され、円滑に各地へ旅行することが可能。関西や日本各地の自治体は、万博でのインバウンド需要の機会を活用するべく、会期前から、「未来の生き方」という基本理念や、「体験」「交流」などの事業展開の方向性と合致したかたちで、観光資源の研鑽や産業の集積など街おこしを行い、地域を活性化させる。

体感型VRによる世界リゾートDayの開催（各国のリゾート観光促進）	心と体を癒す世界の観光・リゾート地を、VR技術により、万博会場に忠実に再現。世界の各地が日替わりに観光リゾート地をアピールする「〇〇リゾートDAY」を開催。世界各地が世界に向けて観光地をアピールできる場所を提供。（例：万博温泉）
EXPO TRAIN	会期前から、参加国、各国の建築様式や文化を表現した万博記念列車を日本各地に走らせる。（例えば、日本列車は畳で内装は木造。）
万博を契機に関西へのビジネス来訪者を激増させる作戦	世界の企業の研修プログラムへの万博見学の組入れを奨励、無理なく来訪者を増やす。その際、体験ツアーや見学・文化観賞で来訪者を地域を挙げて徹底的におもてなし。その好印象感を本人にSNSで発信いただき、世界中に日本へ行きたい人の増加を図る。
世界の富豪・VIPのビジネス招致（プライベートジェット機発着場の整備等）	博覧会場横にプライベートジェット（PJ）発着場とVIP専用ターミナルを整備。PJで世界の富裕層やVIPが、気軽に万博と関西企業に訪れてもらう体制を整備。入国手続き・燃料補給・機体整備サービス、VIPラウンジや視察ツアーでおもてなし。
社会・経済	
好きなコト・周りを幸せにできるコトが価値になる～Human Energy～	スポーツ、ダンス、学び、人助け、健康なものを食べるなど「好きなコト」「周りを幸せにできるコト」をしながら、交流が自然に生まれるような仕組みをつくる。例えばRPG風の冒険ゲームを設計し、来場者は仲間を集めたりイベントを攻略することで、特別な体験ができたり、ポイント（仮想通貨）を獲得することができる（ポイントは会場内の食べ物やパビリオンの優先入場等を可能とする）など。
万博ドリーム	実現したい夢をもつ人が、その情熱や事業プラン等をテレビでプレゼンし、視聴者や投資家等がリアルタイムで採否を決定する。採用されたプランは、ビジネスプランであれば視聴者の少額投資（クラウドファンディング）や投資家等のサポートにより事業化し、政策プランであれば国や自治体がサポートして政策への反映に繋げる。
大阪万博公式クラウドファンディング「万博登竜門」	何かを成し遂げたければ、ネットで大衆から資金調達をするのがあたりまえの時代。万博に向けて、起業家精神あふれる若者の背中を押すために、大阪万博公式クラウドファンディングサイト「万博登竜門」を開設する。2025 年をマイルストーンとし、若者の実践力をさらにブラッシュアップしていく。万博を通じて、新たなヘルスケア産業の創出を目指す。同時に、万博のもつ発信力を利用し、寄付への関心が低い層にまでリーチしていくことで日本の寄付文化促進へと繋げる。
夢洲スーパー特区	夢洲会場及びその周辺地域を壮大な社会実験場として、医療・健康、ドローン、自動走行、ロボット等のスーパー特区に認定することで、国内外から投資を呼び込みイノベーションを生み出す。
夢洲会場を海外とみなすスーパー	夢洲会場を海外とみなすスーパー特区とし、海外からの来訪者は入国手続き等が不要とする。より気軽に海外との交わりが可能で、非課税環境下で、新ビジネスの考察も可能。

特区とし世界とつなげる	陸海の周辺インフラを充実し、京阪神地域毎の技術・エンタメ等のフリンジ事業を開催。
関西全体をシェアリング・エコノミー化し来場者におもてなし	関西の企業や各人による、万博のために提供出来るリソースを募集。例えば、資金・車・人などが考えられ、それらでのトータルシェアリングサービスを展開。皆で少しづつ協力することで省予算化と地域が高い参加意識となることに期待。
シェアタウン	夢洲会場に加えて、大阪全体をシェアリングエコノミーに係る特区に設定。カーシェアや民泊などを完全解禁することで、会場外での様々な交流を促進するとともに、万博会期中の輸送・宿泊のキャパシティを補填。
EXPO－Exchange	例えば会場内で歩き疲れて手助けを必要としているお年寄りと、ごはんを食べたいがあまりお金を持っていない学生。そんな両者の思いを叶えるためのシャアリングエコノミーシステム“EXPO－Exchange” を会場内に導入する。来場者が共通のアプリをダウンロードし、手助けを必要とするお年寄りはアプリでヘルプを求める。それを見た若者は手助けに行く代わりに、お礼に食事券をゲットする。他者を助け、自分も助けられる。必要な時に必要な量だけ。これからの社会に必要不可欠だろう。
eBI －expo Basic Income－	「衣食住に苦労しない世界」。文化的に成熟した国々では幾度となく提案され、そして未だそれに大々的に成功している国は少ない。 ベーシックインカム制度“eBI－expo Basic Income－” が敷かれた万博会場では、来場者3000 万人は入場料・滞在費を各国の通貨で払うかわりに大阪万博内通貨「expo」で毎日ベーシックインカムを得る。各々が「真の豊かさ」を追求する万博がここに実現される。
EXPO Companies Unions	呉越同舟。春秋時代、敵同士であった呉と越の国がたまたま同じ舟に乗り合わせたときに、暴風に襲われて舟が転覆しそうになったときには互いに助け合ったという故事が由来の言葉である。万博に出展する同分野企業は企業間同盟“EXPO Companies Unions” を組み、技術共有、パビリオン間では自由な人員の割り振り、共同運営が行われる。真の豊かさが求められる今だからこそ、企業の固い協力が求められるのだ。
Walk For Two	「歩く国際貢献」を実現する万博内チャリティープロジェクト“Walk For Two”。参加時に、万博内通貨「Expo」を使用し、歩数計付き靴をレンタル。万博内を歩くと、歩数に応じて万博内通貨「Expo」がキャッシュバックされる。たくさん歩くことで最初に払った額以上の「Expo」を稼ぐことも可能で、稼ぎながら、運動ができる企画となっている。レンタル時に支払った「Expo」は、世界中の恵まれない地域の子どもたちが靴を買うための資金となり、靴が送られる。来場者は歩くことを通じて、世界の子供たちと歩く楽しみを分かち合うことができる。
夜空の下に広がる難民キャンプ	世界には、今この瞬間も危険と隣り合わせで暮らしている人がいる。パビリオン内に難民キャンプから見える星空を映し出すプラネタリウムを作り、その中にテントを張って一晩を過ごす。星空の下、難民キャンプで暮らしている人々に思いを馳せる。来場者には、宿泊

	時に自分が使う毛布や布団を買ってもらい、使用した毛布・布団は、万博終了後難民キャンプへ寄贈される。
Female Voices	万博の構想を話し合ってゆく上で、女性からの視点がなくては、万人の感動を生めるはずもない。しかし、2025 年国際博覧会検討会を見てみると、検討委員29 名中、女性はたった2名。日本の男女格差ランキングは世界144 か国中111 位。日本が世界に遅れをとる分野は、“女性の社会進出” ではないだろうか。国際博覧会検討会の女性検討委員を半数までに増やす。それを皮切りに、女性がもっと社会に進出し、輝いていけるように。
ベンチャー企業シニアインターン制度「長老」	我が国の人口減少、及び高齢化による労働関連リソースの問題は深刻になりつつある。こうした社会背景を踏まえ、大阪府の支援によってベンチャー企業へのシニアインターン制度「長老」を実施することで、100 歳まで働ける社会を目指す。 「長老」はシニアに対して労働機会を提供するのみならず、人生の先輩としての役割を最大限に果たし顧問として活躍することのできるような、シニアのプロフィールに適したベンチャー企業をマッチングする。世代を超えた協力が、新産業創出の原動力となる。
Enjoy Working	仕事はあくまで給料のために取り組む辛いもの・・・だろうか？AI等の発達により、比較的単純な仕事が減っていく中、楽しんで取り組むことができる創造的な仕事を体験するプログラムを提供する。具体的には、形式面からはテレワークが可能なデザインオフィススペースを提供し、内容面からは創造的な仕事をワークショップ形式で仮想体験する。
世界の課題を世界中の知見で解決する地球的課題解決基盤	BIE加盟国が様々な自国の課題を提起し、世界中の知恵者が解決策を提案できるための、ネットワークシステムを駆使したオープンイノベーション基盤を整備。可能な国はそのアイデアを支援。次第に、理想的国家・都市像を浮かび上がらせる。
世界がうらやむ夢の日本型超高齢化社会を演出	高齢化社会はすばらしい、こわくない、見本になると来場者が思う博覧会を演出。老人がパワースーツを駆使し、若者が活躍する、明るく楽しい日本のユートピアを展示。高齢化社会への理想解を誇示し、日本への憧れを誘発し、開催の意義をアピール。
会場構想	
待ち時間ゼロのサイバー・フィジカル 博覧会	実世界のパラレルワールドとして、サイバー空間で同期した博覧会を開催。待ち時間に他のパビリオンに最適に誘導する「待たせない博覧会」を実現。遠隔地からのバーチャル参加などで、より多くの人に低予算で魅力あるアピールが可能。
朝の顔、夜の顔	パビリオンが開いていない早朝や深夜も万博を楽しむ。例えば、出勤前の早朝にヨガ・太極拳・ランニングなどで汗をかき、仕事終わりの夜には飲み会やダンスパーティなどナイトアクティビティを楽しむ。
The Matabolic Structure	細胞。それは生物に共通する最小にして共通の基本構造。そこでは日々破壊と創造が繰り返され、いのちの鼓動を繰り返す。万博会場全体が細胞のデザインを模して建造されており、各オルガネラの名前がついた施設が立ち並ぶ。生物史上最も美しく最も自律的な生命体を機能的に模した会場は、3000 万の人々とパビリオンを有機的に結合し、代謝し、

	新たな生命の歴史を刻み始める。
浪速の方舟	大阪湾に浮かぶ夢洲で行う大阪万博では、地震津波対策も万全になされている。各パビリオンは地震が起こった際に水陸両用型シェルターとしても機能し、人々の安全を保障する。その姿は、旧約聖書の『創世記』（6　章－9　章）に登場する、ノアの方舟物語を彷彿とさせる。パビリオンに施されたシェルターデザインは防災大国日本の未来建築のマイルストーンとなってゆくであろう。
ALL　FLAT	たった5cm　の段差。車椅子に乗っている人は、その段差を通過するためにどれだけ苦労しているのだろう。30段の階段。杖をついた方がこの階段を昇るのに、どれほどしんどい思いをしているのだろう。会場内から階段を一切無くし、全てスロープなどのフラット構造にする。そうすることで、車椅子の人や足腰の弱い人の負担を大幅に減らす。
EXPO　Colorful Road	万博会場の道路には、歩行者のウェアラブルデバイスと連携して光るフィルムコーティングが施されている。年齢層に応じて異なる色を発するようになっており、例えば子どもが通ったら赤色、高齢者が通ったら青色に路上が光る。幅広い年齢層の人が万博に来場することで、会場はよりColorful　になっていく。それぞれの世代が自由に彩る万博会場は世代を超えて作られる社会の理想形を示している。
Stress－free　City	物理的・文化的な障壁なく、世界中から集まる数千万人がストレスフリーに楽しめる万博を実現するべく、移動については動く歩道やドローンを活用し、決済についてはFinTechを活用して全面自動決済に、食事はハラル等の多様な文化に対応し、会場全体はバリアフリーにする。
国際博覧会条約（BIE）加盟168カ国での同時万博開催	BIE全加盟国においてイベントを開催する、時空を越えた世界同時万博を実現。大きさやAR環境等を共通の安価なスペックとし、各国の会場の催事環境を統一化。自地域でイベントを開催しない期間は、多地域のイベントがそのまま再現可能。
パビリオン建材の共通化・規格化（トラス規格化等）による省予算化	パビリオン建材を共通規格の建材で共同に大量発注しコストを低減。建材は再利用・再販が可能であり、途上国の学校建設等に役立てることも一考。日本発規格として世界に発信。
超巨大一体型パビリオンによる建造費のローコスト化と再利用	パビリオンをショッピングモールのように一体型大型施設とし、テナントのように利用。多階層化も可能であり、個別に建造するより冷暖房費も含め費用を大幅に抑えられる。大型施設は、万博開催後も屈指のイベント会場や住居として再利用が容易。
万博終了後に住居化を前提としたユニット型パビリオン設計	パビリオンは、一つ一つが住居として転用可能なユニットを組合せて設計。万博開催後に住居ユニットとしてリノベーションし、販売することで、収入源とする。あこがれの施設はデザイン住居として永遠に生き続ける。

仮想アバターによる見学システムの提供	博覧会場内で自分の仮想アバターが会場を見学するシステムを提供。遠隔地の病人などでも、あたかも会場に居るが如く、実博覧会の見学が可能。実際に当該システムは万博以外にも様々な活用が可能。
グローバルサテライト会場	世界の各地で“臨時パビリオン”を設置し、日本に来ることが出来ない地球上のあらゆる人々が来場できるようにする。

検討会委員の主なアイディア
関西圏域に集積されているライフサイエンス分野の企業・研究所などをサテライト会場として位置づけ、広域性を有する博覧会とする旨を追記するべきである。
大阪万博が、大阪・関西から日本全国を巻き込んだ催し物になるように、プレイベントやSNSを多用した　”つながるプロモーション”　をやれれば良いと思う。そして、その動画を世界中に発信していくことによって、つながりは世界規模に増幅されるでしょう。そして笑顔でつながる大阪万国博覧会へと導きます。
3000万人を迎える為、インフラ（交通・宿泊・案内・流通・多言語対応、等）整備を行う。整備された施設や環境が、博覧会終了後にどの様に有効活用され地域に還元されるのか、具体的に打ち出すことも大切である。また、その施設の維持管理に多額のコストがかかるケースが想定されるが、収益が上がるビジネスモデルや、ランニングコストの軽減プランが必要。そして、その時代の若い人々につきささるソフトウェアを提案する。
エネルギーコントロール、防災機能、通信インフラ、低コストで効率的な公衆衛生など、高度なインフラを整えたスマートシティを目指すべき。特にエネルギーに関しては再生可能エネルギーを中心に蓄電池などを活用し、地産地消型のエネルギーシステムを島内で構築してはどうか。将来的にスマートシティのモデルケースとしてまちづくりの海外輸出も展望したビジネス展開も期待できる。
夢洲のまちづくりのコンセプトはスマートシティ。夢洲での万博が未来都市の可能性を示すものになることを期待。世界中から高度な技術を持つ企業が集まり、最先端技術の集積地にすることで、夢洲を未来の展示場にする。その様なまちづくりであればスポンサーも集まるのではないか。
夢洲は人が住んでいない広大な更地である。特区等の認定を受けることでドローンや自動運転等の実証実験地として活用出来るのでは。更には夢洲に訪れた人々の行動などをデータ集積し、様々な商品開発に生かすことも出来る。夢洲を新技術やビッグデータに関する実証実験の場として活用する。
愛知万博では長久手、瀬戸のメイン会場以外で名古屋市内の笹島でも連動開催を行った実績がある。大阪での万博も広域開催を検討してはどうか。メイン会場を大阪、サブメイン会場を京都、神戸として、それぞれの場所でしか体験できないことを中心にしたイベント等を行う。関西域内での移動も活発になり、より日本の魅力を発信できるのでは。
未来は今の技術の延長線上にはない。人類はたえずディスラプション（創造的破壊）を起こしているからだ。AIやロボットが単純な労働を肩代わりしてくれれば、人間はもっとクリエイティブになれる。自動運転は従来のモータリゼーションが作り出した社会と産業を一変させる。テクノロジーの千変万化によって、あらかじめ設定したコンセプトがたちまち陳腐化してしまうリスクもある。臨機応変に事業展開を変えられる柔軟性が必要だ。
知の結集⇒知の創造と結集（課題解決の創造を呼びかけるべき）
事業展開の方向性について、網羅的に示されているが、体系的に整理するべき。

日本が実現をめざす、国際社会にとって価値のある新しい国際博覧会の骨子を基本理念・テーマと併せて具体的に示す骨太の展開を示すべきと思われる。
「常識を越えた万博」「皆で世界を動かす万博」という方向性は賛成。事業展開のアイデアには「各種のイベント案」「全体的な会場構想」「地域国際連携」の3つがあると思う。斬新な万博実現のために、まずは基本理念やテーマを最大限に表現できる会場構想を集中的に検討できるとよいのではないかと思った。それは若手だけに限らず広い年齢層で議論してよいと思う。
2025年には文系・理系問わず種々の分野がどんどんクロスし、「生命（生きる）とは何か？」「よりよい社会とは何か？」という根源的な問いに向けて、思いもよらないアプローチが次々と出ているはず。「ひとりひとりの想像力はつながる。つながるとパワーになる」。どんなテーマであっても、その未来像を共有できる勇気を表現した万博であってほしい。
「待たずに入れる」「並ばない、疲れない」よりは「待ち時間もあったが今日は来て良かった」「人気の展示は全部回れなかったが、家族のペースで楽しめてリフレッシュになった。また来たい」と最終的な満足度で会場全体をデザインできるとよい。「いま自分が5分待つとお年寄りが10分早く入れるので嬉しい」「その5分も楽しかった」と来場者ひとりひとりが自然に思いやりの気持ちを持てる万博になったら素晴らしい。
映画『スター・ウォーズ』の「フォース」は、体内のミディ・クロリアンが活性化することで生じるという設定。細胞内のエネルギー生産工場ミトコンドリアと健康長寿の関係に似ている。ミディ・クロリアン値は機械で測定できる。例えば「今日万博に参加したらこれだけ健康増進になった」と獲得ポイントが見えると楽しい。「そのポイントは世界各国の健康増進のために転用できる」など。
「機械だからできるサービス／機械と人間が協調するサービス／人間だからできるサービス」をきめ細やかにデザインした、人とロボット・AIの新しい共存サービスを日本から提案・発信。人とロボットは時間と場所を分けないこと。レストラン、受付から託児所まで、すべて人と機械の共存サービスで未来を感じさせてほしい。
世界一気持ちの良いジョギングコースが会場内にある（万博後も市民に愛されるような）など。会場往復の交通機関も、乗れば世界一健康的だといえるようなものだと嬉しい。「なるほど、日本はこんなふうに豊かに科学技術を応用するのか」と世界各国に感動していただけるような開催地になってほしい。
【遊びと創造】折り紙、けん玉など日本の遊びはいまや国際的な人気。複雑で圧倒的な作品や斬新なパフォーマンスも増えており、一般の人も楽しめて知能や身体の鍛錬にもなる。想像力豊かに伝統と最先端技術が交差する展示を見たい。折り紙を折る指先の触感が未来への通信手段になる、けん玉の動きが会場の環境づくりに転換されるなど、万博ならではの時空間を超えるしかけがあると楽しそう。
【想像力とデザインをつなぐ博覧会】「人類は未来をどのように想像してきたか？」「人々は未来社会をどのようにデザインしてきたか？」という切り口の展示はよくある。人工知能研究や脳科学などでいま盛んに議論されているのは「想像力がかたちになる瞬間、何が起こっているのか？」だと思われるので、その部分の躍動が鮮やかに感じられる万博になれば、人間の豊かさを再発見することになり、素敵だと思う。
【未来とひとりひとりの関係の視覚化】現在は脳のネットワーク構造や全身の細胞・遺伝子ネットワークが解析され、スモールワールド／ミドルワールド／ビッグワールドと、世界の多層的なつながりの構造に、生きていることの本質を見ようとする時代。自分が万博に参加することは、明日の世界のつながりをつくることだと実感できるVR／ARデザインが全体にあるといい。

【考え方の新しいデザインの提案】現在のネット社会は「ぱっとわかりやすい」ことが重視されがちだが、本当に大切なテーマは一言で表現できないことも多い。何年も考えることでようやく見えてくるものもある。「わかりにくいが大切なこと」をいま以上に皆で共有し、議論できるような、新しい社会ネットワーク構造や人工知能のサポートシステムが、この万博を通して生まれるといい。
【思いやりの心をサポートする技術】私たち人間には進化の過程で生じた「脳のクセ」があり、どうしてもそれがいじめなど難しい社会問題を生んでしまうのではないか。私たち人間が今後「より人間らしい知能」を発揮できるよう、脳のクセを見抜いてサポートしてくる人工知能やロボットのシステムが、この万博で花開くといい。
【恐怖の未来像と向き合う場もつくる】パンデミックや人工知能侵略などによる人類絶滅といった極端な社会不安は、人が恐怖の未来像を想像してしまうから。人間には負の想像力があることも認めた上で、寺田寅彦が述べた「適切に恐がる」のような、よりしなやかな未来への想像力が育める万博になるといい。
超高齢社会では、とりわけ「健康寿命の延伸」が重要である。健康増進には、スポーツを活用すべき。人々は、スポーツを「みるヒト」、「するヒト」、「支えるヒト」から成っている。「みるヒト」と「するヒト」には大きなギャップがあり、「するヒト」を増加させる仕組みを検討する必要がある。これにより、生涯にわたってスポーツを「するヒト」が増加し、そこから関西のトップアスリートが生まれると共に、健康寿命が延伸する。
インターネットに限らず、2025年における最新の通信技術を媒介として、参加型の博覧会とすることは重要。上海万博の際、バーチャルサイト「Expo Shanghai Online」において、会場内各館の展示品を海外からもweb上で体験することができたが、双方向性の体験ではなかった。
国境を越えて世界の人々を繋ぎ、人々を元気にしている日本発の技術やソフト、創造産業や文化産業を強くアピールすることも必要。たとえば、カラオケ、温浴、アニメ、漫画、ファッション、音楽やダンス、アートなども、「幸福な生き方」を追求するうえで不可欠な要素。今後の技術革新にもとづきつつ、より魅力ある事業展開が想定されるべき。たとえば、人気アニメの世界観を最新技術で再現するミュージアム、会場内と世界とを結び、各国のアーティストが共同でテーマ曲を創り上げ、世界中で何千万人かが同時に同じ曲をカラオケで歌うような機会などもあって良い。
たとえば宇宙空間での居住など、人類の生活空間の拡張に関連する事業や展示も想定されるべき。報じられているように、2025年には「火星移住」の計画が具体化している可能性もある。
テーマと響きあい、世界の人が注目する象徴的なシンボルが必要。ロンドン博の水晶宮、パリ博のエフェル塔、シカゴ博のフェリス・ホイール、モントリオール博のアピタ67、70年大阪万博のお祭り広場と「太陽の塔」、上海博の中国館などと、比肩し得るアイコニックな景観を用意したい。
今必要なのは、会場となる夢洲がいかに魅力的なロケーションであるかを示すことである。夢洲は埋め立て地だが、決して不利な材料とはならない。これからの自由な発想で構想できる素晴らしい空間である。
「島」なので、万博の条件となる保税地区として簡単に囲い込めるし、島全体をスーパー特区にして世界に開放し、観光だけでなく外資の投資対象にもなるような仕掛けを作ればいい。国連機関のブランチやアメリカのFDA（食品医療品局）などの認証機関を呼び込めば、夢洲は世界から注目される出島となる。パビリオンやイベント企画は今後詰めていくが、跡地利用を含めた事業展開の考え方を今示すことが、誘致成功への大きなファクターになる。

誘致の顔として経団連の榊原会長が決まったが、他にも「誘致大使」として数人の著名人、文化人にお願いすることにすればどうか。（たとえば、カルロス・ゴーン氏）
「健康になれる」博覧会博覧会場全体が「健康になれる街」の見本となることを目指したい。歩道以外にも、自転車道やランニングコースを外周に設置し、パビリオンに入らなくても歩いたり、走ったりして楽しめるように。また、来場者が気軽に「ゆるスポーツ」や「ダンス」などを体験できる広場があると、運動と同時に交流も図れるだろう。
「途上国の参加」最先端技術はコストが高く、途上国にとっては手の届かないものが多い。途上国が世界に健康で貢献できることにスポットを当てたい。例えばハーブやアロマの原料、ナッツやカカオなどの健康食品など。小さなブースでの出展を可能にし、地元料理や食品などの販売で収益を上げられるようにして、参加国が増えるようにしたい。
日本発先進医療を世界へ発信するモデルルーム病院となるようなパビリオンを作り、万博後は再生医療センターとして活用する（日本の最先端医療のショールームとなるモデル病院のようなパビリオンを作り、日本型医療の輸出を促進する）。ここで行われる医療の現場を、VRで同時に世界中で見学・体験を可能にする。
ウエアラブルデバイスを用いて来場者の健康データの取得を行い、毎日万博発健康情報を発信する。
最先端の医療や遺伝子診断技術による世界のVIPの健康診断を行う。
近未来の介護やリハビリ技術の発信の場として、ロボット技術、ICT活用による日本型介護のショールームを作り、体験してもらう。
超高齢化社会におけるsustainabilityを実証するために、全自動運転車、アンチエイジングハウス、住むだけで元気になるスマートシティを作る。
健康を保つスポーツの世界同時体験を行う。万博会場あるいは周辺で毎週末ギネスに挑戦シリーズと題するようなイベントを行う。例えば、3万人でラジオ体操、3万人でヨガ、舞洲庁舎を歩いて上る1万人運動、淡路大橋を3万人で横断などが考えられるが、これらのイベントをVRやICTを活用して、日本や世界で参加者を募る。
食による健康長寿として、ユネスコ登録無形文化遺産の和食を広げ、農作物の海外輸出につなげる試みを行う。期間中万博あるいは周辺の舞洲会場などで食の祭典を開催し、全国各地の農作物や機能性表示食品の展示販売を行う。また、サテライト会場として京都での和食体験、淡路・神戸・南河内などで農業体験とテーマパーク、和歌山・淡路島で漁業体験とテーマパーク（黒潮市場、近大マグロ養殖など）など、近畿一円で万博と連動して開催する。
淡路島の農業・漁業、和歌山県の農業・漁業を追加すべきである。淡路と夢洲、和歌山港・関空・夢洲間などで、自動運転観光船の実証実験をする。
USJなどとの共通入場チケットで来場者を誘引するとともに、それぞれの施設の混雑状況をリアルタイムで発信し、混雑緩和を図る。
夢洲乗り入れは、すべて全自動シャトルバスに限定して、AIで交通管理を行う。
面積に関して、埋め立てを必要としないラグーン（人工環礁）を万博会場として設定し、養殖マグロなどの機能性水産物の展示（巨大釣り堀）と万博食堂などでの提供、揚力発電や海上ソーラー発電施設の活用によるsustainabilityの展示場として活用する。ラグーンの埠頭の利用により、水上バスの活用が可能になるほか、会場地の拡大になり、混雑緩和につながる。跡地は、クルーズ観光に利用し、IRに転用する。

ドローンを全て万博事務局に登録し、ドローンの活用による飲食の提供やグッズ販売などを行い、施設部分の不足を補う。ドローンなどの実証実験を行うための特区にする。
エントランスエリアは、舞洲・南港側の入り口に設け、分散入場を可能にする。
中央集権型社会から地方分権型社会への転換（成長社会から成熟社会へ）。明治以降の成長社会のわが国では、国が画一モデルを示し、地方が追従する「中央集権体制」が機能したが、極度に東京一極集中が進み、地方の疲弊と首都の脆弱性が露呈した。「経済的豊かさ」より「心の豊かさ」、「集中」より「分散」、「画一」より「多様」、「標準」より「個性」が求められる「成熟社会」に移行した現代においては、国の役割を外交、防衛、通貨、マクロ経済政策などに限定し、それ以外は地方の自主的な取組に委ねる「地方分権型」の社会構造への転換を急ぐべき。
国土の双眼構造の実現過度の東京一極集中を是正するためには、政治、行政、経済各方面から「国土の双眼構造」を実現する必要がある。歴史・文化遺産の蓄積、豊かな自然、先進的な科学技術基盤など、関西は国土の双眼構造の一翼を担う圏域に相応しい。また、首都直下型地震の発生が懸念されるなか、首都機能のバックアップのためにも防災や救急医療など府県域を越える広域課題の解決に実績のある関西が国土の双眼構造の実現に大きな役割を果たすべき。
大正・昭和・平成、そして大阪万博へと続く未来へ。現在の大阪の町並みは、いくつもの時代が深く混ざり合った”ごった煮”の街である。大阪の人たちは、笑いが大好きである。『笑うことは許すこと、許すことは笑うこと』。大阪万博以後の大阪は、世界でも有数の多様性溢れる街になるべきである。多種多様な人間が、様々なロボットたちと協業し、助け合う街。その潜在的なキャパシティを、大阪は既に持つ。大阪は、”大きな大きなお茶の間”である。浪速名物の”世話焼き”と”いっちょかみ”国連が提唱している、あらゆるレベルでの経済、環境、社会の関心事の一体化を図る事。持続可能な開発の達成である。未来の青図を大阪から日本から、世界へ。
「スーパー実証特区」の認定。大胆な規制緩和を行い、大企業はもとより中小企業やベンチャー企業が、自社のアイデアや技術の商業化、実用化に向けた様々な実証実験を行うことが出来る「スーパー実証特区」として、大阪・関西エリアを活用する。
混合診療が可能な病院や、インターナショナルスクールを誘致することで、外国人を中心としたコンドミニアムを集積させ、高度人材受け入れの為のエリアとする。
１０００年以上の歴史を有する関西に点在する文化・歴史・芸術を、夢洲を関西の観光のゲートウェイとすることで世界中に広めることが可能になる。
新大阪に北陸新幹線やリニア新幹線が乗り入れることで、また、夢洲にマリーナを建設し瀬戸内海へクルーズ便を就航させることによって、関西に降り立つインバウンド観光客を日本各地へ展開させる事が出来る。 かを大阪万博の開催によって、世界中にアピールする事が出来ると考える。

ブレグジット、アメリカの大統領選や欧州の政局は、ひと、もの、かねのブロック化を想起させるものの、実際にはグローバル化の進展を止めるまでにはならないだろう。

ただ、現在の現象にはそれなりの根拠がある。多くは貧困や紛争が原因であり、二者択一論ではなく、丁寧な議論、丁寧な解法が求められる。世界は、そして日本は真摯に問題に向かい合う必要がある。

グローバル化の一方、ローカル（地域）に根差した文化や都市や自然景観、伝統的な産業・農業には、観光業（ひとの移動）の伸長に合わせて増大する旺盛な嗜好を満たすためにも、より注目が集まると思われる。

この旺盛な嗜好性は「驚き」や「感動」といった感情の起伏を求めるからだ。これを対象したビジネス分野が成長するのではないか。

この点から上記の伝統文化に加えて、漫画やゲームなどのサブカルチャーも魅力となりえる。関西には、この点で世界の需要に貢献できる。

2025年以降の世界への課題を提起し、解法を提案できる万博を目指したい。

“モノ・コト・ひと　がつながる、循環型社会の実現”

自動言語翻訳サポートや、AIやロボティクスによる身体的・知的アシストにより、高齢者や外国人、障がい者も障壁なく活躍ができる。

「使い切り」「売り切り」ではなく、企業と顧客がつながり、継続的に価値ある「モノ＋価値」を提供する「循環型事業」の実現。

再生可能エネルギーの活用によるゼロエネルギータウンの実現に加え、生産地や職場、住居の近接化により、モノやサービスも地産地消される食職住遊近接型タウン。

交通機関、競技場、万博等の大型イベント会場など、人が一度に集まる場所では、混雑解消のための群集誘導ソリューションや、ウィルス検知・拡散防止ソリューションにより人々がストレスなくどこへでもアクセス。

モノだけでなく人もネットに繋がり（IoH）、1人1人のバイタルデータや環境条件の把握により、特定の症状が起こる人の共通条件から早期の病気の原因特定や解決などに活用される。

1つ目は、大阪だけでなく日本全体、特に地方都市の交通の利便性はまだまだ乏しく、時間的にロスが生じることが問題だと感じる。どの世代にも配慮したノンストレスな社会を創造しなければならない。インフラが原因による経済の地域格差を改善し、全体的な活性化を見据えた街づくりを重点的に行う必要がある。

2つ目は、金融施策について、ベンチャーがよりチャレンジできるフィールドを大阪が積極的に発信するべきである。大阪が中小零細企業のコアタウンとして認知されるようになることが大きなポイントのひとつとなると考えている。

3つ目は、インフォメーションの不足。大阪には、素晴らしい場所やお店、文化がたくさんあるが、上手にPRできていない。まだまだ街の良さを伝えきれていないと感じている。特に、外国人への発信、富裕層を受け入れる土壌がまだまだ不足している。あらゆるゾーンのお客様に楽しんでいただけるよう、地域の特長を生かした細やかな街づくりとプロモーションの成功例を大阪がつくることで、2025年以降の存在意義を指し示すことができると考える。

大阪万博から半世紀の2020年を起点として、「調和」をキーワードにした新しい人類社会をつくる活動を、国内外に呼びかけることに始め、5年間の研究・開発期間を経て、その成果を2025年の日本に持ち寄るなど、新しい国際運動となる、次世代万国博覧会のありかたを提案すべきである。

未来を想像し、未来を創ることに貢献できる、新しいタイプの文学賞の設立。関西はかつての小松左京氏を始め、文系と理系の垣根を超えて未来を豊かに想像し、その実現へ向けて行動するパワーに溢れた人材を育む場所だったと認識している。これまで文系と理系の間には隔たりがあり、その境界を越えて表現しようとする人には軋轢や偏見もあったと思う。だが文学で科学をおこない、科学で文学をおこなってよい。既存の文芸ジャンルさえ超えてよい。気負うことなくそのような活動を自由におこなう人が増えるなら、どんなに素晴らしいことだろう。この関西発のパワーを世界普遍のものにしたい。従来の文学・ノンフィクションや科学技術の枠組みを超えた、未来を想像し表現してゆくことの豊かさを評価する文学賞を設立し、運営してゆくことに協力したい。
日本では世界で最も高齢化が進展し人口減少が進んでいるが、この社会的課題に対応するためには、トータルヘルスケア・ソリューションからの広範なアプローチが必須である。とりわけ関西には、最適地として経営資源が集積し、健康関連産業の拠点として世界に向け発信している。長い歴史・文化・伝統に培われた関西は、東京・名古屋とのメガリージョンを形成し、経済発展した近隣諸国との交流も進み、アジア有数の中核都市圏（ハブ）となっている。
関西には多くの外国人観光客が訪れているが、今後関空・伊丹・神戸の3空港の一体運営が実現すれば、この関西を玄関にして海外からより多くの観光客やビジネスパースンを呼び込む環境が整う。この実現のため、万博会場となる夢洲を恒久的に利用できるようしっかりと計画していく必要がある。
埋め立て地という「島」の特性を活用し、夢洲をスーパー特区にして世界に開放する。観光だけでなく投資の対象になるような仕掛けを作る。海外にも負けない国際的な展示会や見本市のできる大型ビジネスイベント会場を建設する。国連機関のブランチやアメリカのFDA（食品医療品局）などの承認機関を呼び込む。ｉPS細胞など先端医療研究の成果を集約し、ITやバイオ関連企業を呼び込む。
関西は「日本文化における核心的圏域」である。2025年の国際博覧会は、関西が文化の領域にあって世界を代表する圏域であることを、国際社会にあらためて強く提示する契機となる。そのためにも、新たな文化産業、創造産業、コンテンツ産業などを創発的に伸ばすべく振興策を重点化、建築やデザイン、映像産業やコンテンツ関連、食文化などさまざまな領域において、世界の先端をいくクリエイティブな試みを重ねる姿勢を示すべきである。関西は、古代から今日に至るまで1400年を越えて都市圏域を持続しているという世界的にも稀な歴史性を背景に、美術工芸、華道や茶道などの生活文化などにあって、先人から継承した良き伝統を維持している。それに加えて、新たな文化を創造している圏域であることを、再度、訴求する必要がある。
関西は、先端的なライフサイエンス関連産業の集積地として存在感を示しつつある。今後、その中枢性を高め、アジア各地域に形成されている他のスーパーメガリージョンとの競合にあって、優位性を示す必要がある。
関西では、各都市が個性を発揮することで、世界でも稀な「国際集客都市」群を構成している。首都圏～名古屋～関西を一帯とみなすスーパーメガリージョンにあって、西のゲートとなる役割を担う。同時に瀬戸内海沿岸の東のゲートとして国際観光の拠点となる。物流、人流を含めて、広域における空港や港湾、高速鉄道や高速道路ネットワークのさらなる拡充、および基盤整備がのぞまれる。
2030年代には、その時点における最新のスペック、かつ世界的に競争力のあるアリーナや展示施設群からなる新たな「国際MICE拠点」の構築が必然となる。たとえば大阪においては、1980年代から90年代に建設された大阪城ホール（1983）、インテックス大阪（1985）、マイドーム大阪（1987）、京セラ大阪ドーム（1997）などが、順次、大規模なリニューアルもしくは建て替えの時期を迎えることを前提として考慮するべきである。

関西は、圏域そのものの「スマート都市化」にあって、先進的な都市モデルや社会モデルを示すことで、世界各国から視察に来るような都市群とならないといけない。そのためにも道路や上下水道、公園、河川、鉄道、街路照明など、あらゆる都市基盤の整備や強靭化、さらには維持管理にあって、最先端の情報関連など先端的なテクノロジーが採択される必要がある。
モノ・コト・ひと　がつながる、循環型社会の実現 自動言語翻訳サポートや、AIやロボティクスによる身体的・知的アシストにより、高齢者や外国人、障がい者も障壁なく活躍ができる。 「使い切り」「売り切り」ではなく、企業と顧客がつながり、継続的に価値ある「モノ＋価値」を提供する「循環型事業」の実現。 再生可能エネルギーの活用によるゼロエネルギータウンの実現に加え、生産地や職場、住居の近接化により、モノやサービスも地産地消される食職住遊近接型タウン。 交通機関、競技場、万博等の大型イベント会場など、人が一度に集まる場所では、混雑解消のための群集誘導ソリューションや、ウィルス検知・拡散防止ソリューションにより人々がストレスなくどこへでもアクセス。 モノだけでなく人もネットに繋がり（IoH）、１人１人のバイタルデータや環境条件の把握により、特定の症状が起こる人の共通条件から早期の病気の原因特定や解決などに活用される。
先進国では、平均寿命と健康寿命の差が課題となっており、途上国では、健康格差や公衆衛生などの面で課題を抱えている。 こうした課題解決に大きな役割を果たすと期待されるのが、進歩のめざましいICTやAIなど最先端の技術である。2025年万博を機に、これまでにも世界の技術革新を先導してきた日本の力と、再生医療などライフサイエンスやモノづくりといった大阪・関西のポテンシャルを結集させ、世界に貢献する技術や商品、サービスを提案し、発信していきたい。そして、大阪・関西、日本が世界の先進モデルとなり、誰もが自分らしく、楽しく、いきいきと人生を全うできる社会の実現をめざしていきたい。
今後もグローバル化とともに新興国経済の成長が持続し、2025年頃、世界では生活に余裕のある層の厚みが今よりも増しているはず。彼らの関心は「経済的な豊かさ」から「よく生きること」に移っていると考えられる。 一方、貧困問題は未解決の可能性が高い。貧富に関係なく全ての人が「よく生きる」道は、簡単には見出せないだろう。 日本は、全人類の願いである「健康」を軸に、世界に「よく生きる」ための解決策を示すべき。科学技術や産業に磨きをかけ、そのための斬新な商品やサービスを世に送り出し、新しい社会システムづくりにも挑戦する。それらのコモディティ化にも挑み、貧富の差を健康の差としない世界も目指すべきである。 2025年の大阪万博では、日本の叡智を結集して、誰もが健康寿命を伸ばせる方策（医療、食、スポーツ、社会インフラ）など、全く新しい未来の生き方を提示したい。そして2025年を全人類の「生き方」の変革の年としたい。
夢洲を究極のスマートシティにして、人口減少過疎地域のモデルとする。全自動交通システム、ドローンによる宅配、電子決済システム、新エネルギーによる完全電力供給、植物工場による生鮮食品自給など、ロボット・AIによる人手を減らしたスマートシティのモデルを作る。スマートシティの輸出モデルを作る。

万博を通じて、関西全体の広域化構想を更にすすめ、行政の無駄を省き、実質的な道州制としての運用を可能にする。
2025年、団塊世代が75歳を迎える。本格的な高齢化社会の到来。高齢化は、先進国のみならず、すべての国家が近い将来に経験する不可避の社会的危機である。我が国には、高齢者の単身化、さらには少子化という課題もある。高齢者が、いかに心身ともに充実した晩年を過ごすことができるか？我が国は世界の模範となるべき。
家庭内環境の最適化。慣れ親しんだ自宅が最も安らぐ。既存住宅を短期間かつ安価にバリアフリー化する技術開発。家事ロボットやペットロボットの普及。IoTによる健康状態の見守り。
Aging Improving District。高齢者に優しい、かつ若者にも住みやすい街づくり。大きな字のサイン。道路のベンチ。余裕をもって渡れる青信号、しかも渋滞は回避する信号統合的信号システム。GPSや監視カメラによる見守り。

その他	
祈りの鐘～Pray for the others～	同じ時に、同じ場所で、同じことを。人類の共感能力は、集団の協力を高め、共同体を一つの行動へと促してきた。しかし、現代では生き方が多様化し、皆が違うが故に他者を想像し、互いに共感することが容易ではない。共感をもとに繋がりあってきた古の記憶を呼び起こすべく、夕暮れの60 秒前から静謐に鐘だけが鳴り響く。来場者は歩みを止め、瞼を閉じ、静かに「誰か」のことに思いを馳せる。共感を、ここから。
愛情アーカイブス	ふと、無性に、亡くなった人に会いたくなる時がある。2025 年、家庭用AI 搭載ロボットが万博にて展示される。生きた証を動画や画像など「情報」として残せる現代。「情報」の次に、残したいものは何か、それは「愛」ではないだろうか。ロボットが家庭の日常を記録。家族の誰かが亡くなった後、あの人と会いたいと思った時にホログラムで故人が現れ、日常の風景と共にあなたに語り掛ける。「会いにきてくれたんだ。」ああ、これが愛なんだ。「愛」を残せる。生きる意味が一つ増えた。
あなたのこたえ、みんなのこたえ	「あなたは電車の運転手です。5 人を救うために、ハンドルをきって、1 人をひき殺せますか？」—「トロッコのジレンマ」をはじめ、これまで哲学者が行ってきた思考実験を、来場者一人一人に行う。来場者はICT デバイスにて匿名投票することができる。複雑性が増す世界において再度注目されるべき倫理観。答えのない「問い」への現代人のありのままの答えを浮き彫りにする。
La résurrection	“Clothes makes the man.” －Mark Twain－ 初めて衣服を作ったであろう人類は、手近なものを組み合わせ意匠を凝らし衣服文化を編み上げていった。本パビリオン“La résurrection” では現存する最古の人類のオートクチュール「タルカン・ドレス」をはじめ、世界中で発見される様々な古代衣装を現代に蘇らせる。パビリオンでは展示のほかに衣服の製作体験をすることができ、衣服を創り始めた人類に自らを重ね合わせる。

一音BAR「ば」	「ば！」「ばば！」「ばーばばば、ばば？」「ばばばっ！？」「、、、ばばばばばばば。」 一音BAR「ば」での日常会話である。人類の原初的な言語の発生を探るべく、「ば」一音でのみ、会話が許されるBAR。人類がまだ高度な言語を獲得していなかった時代、私たちの祖先はどのようにコミュニケーションをとっていたのだろう。人類はこのカオスの中からいかに言語的秩序を生んできたのだろう。そんなことに想いを馳せながら、また一杯お酒がすすむ。
Let ' s Hug Together！	情報化社会、国際問題、引きこもり、家庭崩壊…。こんなにたくさんの人がいるのに、どうしても繋がれない。そんな今だから、万博ではこう言おう。“Let ' s Hug Together！”。 「フリーハグズ・アンバサダー」は合言葉と共にハグの輪を広げてゆく。資格取得は簡単。笑顔で目を見ること、怖がらずに合言葉が言えること、そして、ハグのありがとうが伝えられること。
郷愁の香り	見知らぬ土地に行った時、私たちは視覚のほかに聴覚、嗅覚、触覚もフルに活用して、その土地の雰囲気を感じ取る。ノスタルジア体感パビリオン「郷愁の香り」では、世界各国の風景をそのまま再現したビニールハウスが立ち並び、現地の人を実際に招いて交流することができる。映像や音楽といった視覚・聴覚情報だけでなく、湿度・匂いといった情報も忠実に再現される。その土地の匂いや空気まで伝わってくる、そんな空間を目指して。
若者万博検討会議「WAKAZO（若造）」	大阪万博のテーマ、「人類の健康・長寿への挑戦」は若い人はワクワクしづらいかもしれない。しかしこのようなテーマだからこそ若者が積極的に発案していかなければならない。若者検討会議 " WAKAZO " は万博開催時期に25 歳以上40 歳未満、つまり2016 年現在17 歳～ 31 歳の若者が対象。" WAKAZO " 内で採用された案を既存の有識者による検討会へ提言書として提出する。このシステムによって若者が発案し、ベテランが決議を担当する共創が実現できる。
万博を、ふるさとに。	大阪府にふるさと納税することで、お礼品として万博の入場チケットが送られてくる。ほんの小さなあなたの気持ちが、万博という大きな大きな形となってあらわれます。より充実した万博を開催するためにも、また万博後も大阪が「人類の健康・長寿」というテーマのもとで発展していくためにも、ただ万博に来るだけではなく、大阪をちょこっと応援しませんか。
共育遠足「万博へGo ！」	万博は日本全土にドキドキとワクワクを与える。共育遠足企画「万博へGo ！」では、世代を超えて心躍る万博へお年寄りと児童が共同で行くことにより、若い子供たちとお年寄りの交流が図られる。児童たちは幼稚園、小学校などの単位で地域の養護老人ホームに赴き、遠足にむけてお年寄りたちと交流会を行う。遠足当日は、子供たちがお年寄りに寄り添って万博内を案内する。かつては当たり前であった「子どもとお年寄りのふれあい」。共創は、まずふれあうことから始まる。
「万博ファンド」の設立	資本主義は本来、「皆が豊かで幸せになれる社会を創るためには」という点に端を発する。しかし、現代社会では株主の短期的利益のみを追求した投資が目立つ。そこで我々は「万博ファンド」を設立し、人類の長期的利益、公の利益を第一に考える基礎研究、NPO 活動、企業活動に積極的に投資する。ファンド資金は、50 年後、100 年後の人類の発展

	に投資する気概のあるシニア資産家から主に拠出される。
140 字アイデアホームページ「WAKAZO online」	インターネットの世界。そこは、時間や場所の制約がなく、規模を問わず効果的な議論ができる世界。インターネットで「書くディベート」を促すアイデアホームページ「WAKAZO online」では、市民、万博運営サイドの両者が、万博から派生する様々なトピックについて「提案」や「アイデア募集」を行うことができる。質問がしやすいように匿名での投稿を可能にするなど、双方向に多様な議論を促すインターフェースを意識する。世代を超え、あらゆる人が「書く」ことで、万博が創られてゆく。
Buddy 2030 Project	子どもたちの想像力は、時として大人のそれを凌駕する。大人たちの力は夢を現実にする。世代間共創プロジェクト“Buddy 2030 Project” では、中学生以下の子供達と、建築分野のプロフェッショナルとがコラボレーションすることで、設計段階から2030 年の未来の街を共に描き、ブロックを使ってプロトタイピングする。大人たちは子供たちから突飛な意見や自由なインスピレーションを引き出し、完成品は万博跡地の活用案として取り入れられ、子供たちの未来へと反映されてゆく。
るんるん！ルーデンス	「るんるん！ルーデンス」は来場者にとっての、憩いの場だ。大人から子どもまで幅広い世代が、遊び、くつろげる緑地スポットであり、懐かしのおもちゃ、昔から遊ばれてきた盤ゲーム、そして集まった不特定多数の人で「ゆるスポーツ」が行われる。また、ベンチに座ってゆっくりと会話したり、芝生の上でお昼寝するなど、時間を気にせずくつろぐことまでできる。 人が体を使って「遊び」に熱中できることで世代を超えたつながりが生まれる。
孫割	「 おじいちゃん、おばあちゃん、一緒に万博いこう！」孫からこのような声が掛かる。「よしよし、どれ、行くしかないのう。」大阪万博では、祖父母と孫が同時に入場すると孫の入場料が割引される「孫割」が実施されている。祖父母は、1970 年の大阪万博の大阪万博を思い出して当時の思い出を孫に語り、孫は万博が描き出す未来の街に目を輝かせ、将来の夢を祖父母に語る。普段は中々話せないような思い出や夢なども、万博をきっかけにして語り合えるようにしたい。
価値観の共創・共有	幸福に関わる何かしらの人類共通の価値観を世界中の人々で考え共有することで、ソフト面でのレガシーを後世に残す。
世界同時体験	万博会場内のコンテンツをVR等の新しいメディアを用いて世界に配信することで、来場できない人々にも万博という共通体験を楽しんでもらう。
Expo CRM	来場者とのカスタマーリレーションシップをしっかりと構築し、日本・関西へのリピーター客を創出する。
A・K・A・S・H・I	死ぬまでに自分が生きた「証」を残したくはないだろうか？創作活動等を通じて、自らの創作物を万博会場に半永久的に残す。
Asking	万博開催前から、万博で問題提起したい問いを世界中から集計し、世界の人々が関心を持っている内容を各パビリオンのテーマに設定する。
万博アンバサダー	大阪万博のアンバサダーを選出し、各国に万博への出展を呼びかける。

時の部屋	過去、現在、未来の文化・技術を体験することができる。過去の知恵を現在に生かすこともできるだろうし、未来の課題について事前に向き合い、より良い未来を創る契機ともなるだろう。
クラウドからのメモリアル集金による費用捻出	クラウド（大勢の群衆）から少しずつ寄付いただく集金システムで、博覧会予算を補完。例えば、寄付いただいた方の遺伝子情報をタイムカプセルで1万年保存する。一万年の間に技術が進歩し、未来に再生出来るかも知れないロマンを提供。
世界的オークション・プレイスの誕生	万博会場で生命に関連する世界のディーラーを集めた専門オークションを開催。例えば、内容は途上国でも出展可能な食材やBigデータに加え、医療技術・人材等。関西はこれを機に恒久的な世界の生命オークション・プレイスとして始動。
半年間・三都は無理なく24時間眠らない街と化す	京都・大阪・神戸の街は、万博に併せ24時間眠らない街とする各店舗は24時間開店するのではなく、深夜営業店は昼間閉店する等、シフト開業制。深夜エンタメ等のサービス展開はもとより、ITによる万博世界同時開催にも対応。
「もしも」を「リアル」に体験	仮想現実（VR）や拡張現実（AR）の技術を活用し、「もしもの世界」を体験。「動物と会話」、「憧れの職業（宇宙飛行士など）体験」、「歴史上の偉人と会話」、「魔法を使う」などを体験する。
月の塔	1970年大阪万博の記念モニュメント「太陽の塔」と対に「月の塔」を作成。開場時は真っ黒な新月だが、来場者が黄色いタイルに思いを書いて貼付することで、閉会時には綺麗な満月になる。
やおよろず☆ぽーと	自然万物に神様が宿ると考え、あらゆる物や現象に敬意を払い八百万の神を見いだす神道。神も人と同じように生活し、互いに寛容、受容し合う文化が古の日本に培われてきた。その中でも総氏神として君臨する天照大神が祀られている伊勢神宮は、「お伊勢さん」として人々から今も愛されている。万博内に設置されたヘリポート「やおよろず☆ぽーと」は、関西のヘリ空路インフラの中心地であり、伊勢を始め、関西辺縁にヘリで飛来することができる。多様性を保ち、互いを認め合う社会を成り立たせる。その答えはお伊勢さんにあるかもしれない。
モビリティ革命	2025年の万博では、豪華客船、自動走行車、ドローン・ヘリコプター等、現在では非日常的な乗り物が、当たり前のように使われている。乗車時間は、単なる移動時間ではなく、エンタメの時間として来場者にワクワク感を与えてくれるだろう。
Know Each Other, Make Together	市民と海外からの来場者がオープンなカフェテリアでランチを取りながら情報交換をしたり、各国からボランティアを募り、運営を共同で行うなど、リアルな国際交流の機会を設ける。また、国際機関等が問題意識を持っている課題を世界中から集め、その解決をテーマとしたパビリオンを設定するなどグローバルイシューの解決に取り組む。